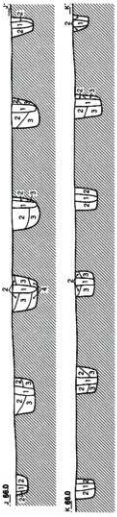


群よりも古く、第155号竪穴式住居跡よりも新しい。

出土遺物は、土師器坏（1）、須恵器高台付椀の他、柱穴からわずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

1は、土師器の坏AⅡである。

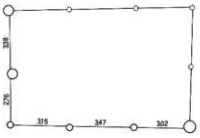
2は、須恵器（HS）の高台付椀である。

第41号掘立柱建物跡（第526図）

I－15・16、J－15・16グリッドで確認された。第41号掘立柱建物跡の周辺は、小穴・土壙が集中し、当該柱穴の確認に手間取った。北・東側は、調査区外のため確認できなかったが、梁行き2間×桁行き3間の建物（三間屋）と推定した。

柱穴は、円形の掘りかたであった。柱穴の覆土は、礫混じりの黒色土であった。柱穴は、長径0.26m×短径0.52m×深さ0.19mを測る。

棟方向はN－85°－Eを指す東西棟であった。規模は4.82m×3.08mの建物となる。柱心心間の距離は、図の通りである。



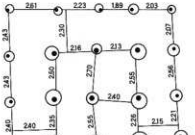
遺構の切り合いは、I－16土壙群や第40号掘立柱建物跡と複雑に重複するが、当該掘立柱建物跡がもっとも新しい。

出土遺物は、柱穴からわずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

第42号掘立柱建物跡（第527図）

S－14・15、T－14・15グリッドで確認された。遺構構築面は、砂利層の上面であったため遺構の確認は、大変困難を極めた。梁行き2間×桁行き3間の身舎の四面に庇のつく建物（三間四面屋）が検出された。

身舎の柱穴は、南北軸のやや長方形の掘りかたであった。柱穴は、長径0.89m×短径0.74m×深さ0.61m



第415表　第42号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	12.0	2.8		7.1	B, E, H	普通		淡橙	40	P－14
2	坏 A Ⅳ	H	11.8	3.6		6.0	B, E, H	普通		淡橙	20	P－10
3	椀	NS	12.7	2.9		6.7	B, E, H	良好		灰白	80	
4	高台付椀	K				7.0	B, E, H	良好		灰白	20	被熱

を測り、比較的大形であった。他の三間四面の建物に比較すると、掘りかたの深さが浅かった。

P3・4・5には、身舎の内側に小形の柱穴が接して確認された。床束穴と推定した。また身舎の屋内の棟筋に沿って、小振りの柱穴が確認でき、これも床束穴と判断した（P11・12）。なお身舎の棟筋の柱穴は、円形で小振りであった。このことから他の側柱穴では、床束は確認できなかったが、身舎には、床が貼られていたことが確認できた。

庇の柱は、身舎の柱と対になるように柱通りを揃え掘られていた。柱穴は、長径0.59m×短径0.56m×深さ0.52mを測り、小形であった。身舎・庇とも柱穴の掘りかた内には、拳大の礫や粘性の強い黒色土が、堅く充填されていた。身舎の柱痕跡は、遺構確認面からすでに確認でき、断面観察でも立ち腐れ状態で確認できた。

棟方向は、N－3°－Wを指す南北棟であった。規模は、身舎だけでも7.5m×4.46mを測り、四面の庇を含めると12.2m×9.08mとなる。柱心心間の距離は、図の通りである。

遺構の切り合いは、第178号竪穴式住居跡よりも古く、第175号竪穴式住居跡よりも新しい。

出土遺物は、柱穴から土師器坏（1・2）、須恵器の坏（3）、高台付椀（4）の他、わずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

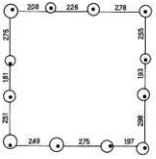
1・2は、土師器の坏AⅣである。2は底部が欠損している。

3は、須恵器（NS）の椀である。

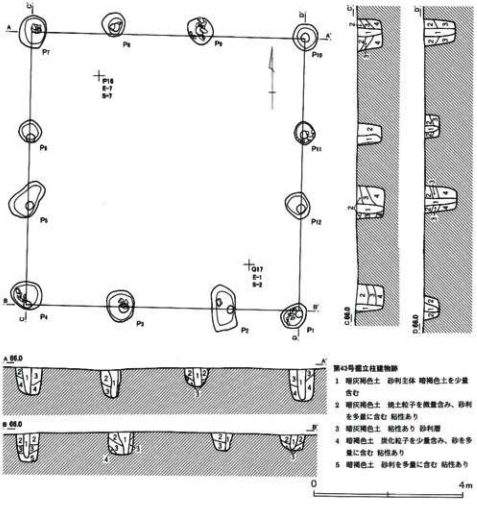
4は、灰釉陶器の高台付椀である。底部のみである。

第43号掘立柱建物跡（第528図）

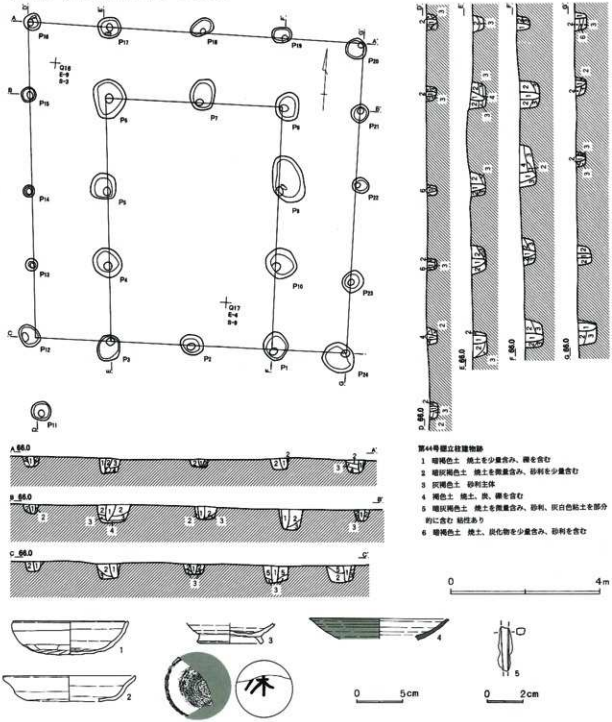
P－16・17、Q－16・17グリッドで確認された。第43号掘立柱建物跡の周辺は、比較的遺構が疎らであったが、遺構確認面は、礫層上面のた



第528図　第43号掘立柱建物跡



第529図　第44号掘立柱建物跡・出土遺物



第416表　第44号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 C	H	12.1	3.6		5.2	B, D, H	普通		黄橙	40	
2	坏 C	H	14.0	2.7		7.1	B, E, H	普通		黄橙	20	P－4
3	高台付椀	N S				6.7	B, E, H	良好		灰白	30	P－19 墨書
4	高台付皿	K	14.6				B, E, H	良好		灰白	10	P－19

め当該柱穴の確認に手間取った。梁行き3間×桁行き3間の建物（方三間屋）と推定した。

柱穴は、円形の掘りかたであった。柱痕跡は黒色土で確認しやすく、掘りかた内には、砂利を主体とした粘質土が充填されていた。柱穴は、長径0.94m×短径0.68m×深さ0.41mを測り、比較的大形であった。

棟方向は、N－2°－Eを指す。規模は7.28m×7.25mの建物となる。柱心心間の距離は、図の通りである。

遺構の切り合いは、第537号土壙より古く、第44号掘立柱建物跡より新しい。

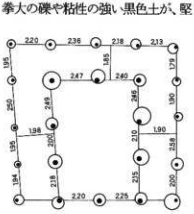
出土遺物は、柱穴からわずかに土師器・須恵器の破片が出土した。なお第43号掘立柱建物跡の西側（P－16・17、Q－16・17）で大量の土器が出土していたが、本遺構との関わりは確認できなかった（グリッドの出土遺物参照）。

第44号掘立柱建物跡（第529図）

Q－16・17、R－16・17グリッドで確認された。遺構構築面が、砂利層の上面だったため、遺構の確認に大変困難を極めた。梁行き2間×桁行き3間の身舎の三面に庇のつく建物（三間三面屋）が検出された。

身舎の柱穴は、円形の掘りかたであった。床束は確認できなかった。長径0.91m×短径0.6m×深さ0.63mを測り、比較的大形であった。庇の柱穴は、0.61m×短径0.54m×深さ0.35mを測り小形であった。

庇の柱は、身舎の柱と対になるように柱通りを揃え掘られていた。身舎・庇とも柱穴の掘りかた内には、拳大の礫や粘性の強い黒色土が、堅く充填されていた。



身舎の柱痕跡は、遺構確認面から確認できた。断面観察でも柱痕跡は確認できた。

棟方向は、N－5°－Wを指す南北棟であった。規模は、身舎だけでも6.48m×4.73mを測り、三面の庇を含めると10.4m×8.97mとなる。柱心心間の距離は、図の通りである。

遺構の切り合いは、第43号掘立柱建物跡よりも古い。

出土遺物は、柱穴から土師器坏（1・2）、須恵器の高台付椀（3）・皿（4）、鉄製品（5）の他、わずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

1・2は、土師器の坏Cである。2は底部が欠損している。

3は、須恵器（NS）の高台付椀である。底部外面に墨書「床」がみられる。底部のみである。

4は、灰釉陶器の高台付皿である。底部が欠損している。

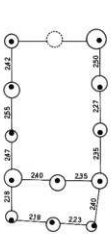
5は、棒状鉄製品である。

第45号掘立柱建物跡（第530図）

Q－17・18、R－17・18グリッドで確認された。遺構構築面が、砂利層の上面だったため、遺構の確認に大変困難を極めた。梁行き2間×桁行き3間の身舎の南に一面庇が付く建物（三間一面屋）が検出された。

身舎の柱穴は、円形の掘りかたであった。長径0.89m×短径0.81m×深さ0.56mを測り、比較的大形であった。庇の柱穴は、0.77m×短径0.59m×深さ0.52mを測り小形であった。

庇の柱は、身舎の南妻の柱と対になるように揃え掘られていた。身舎・庇とも柱穴の掘りかた内には、拳大の礫や粘性の強い黒色土が、堅く充填されていた。身舎の柱痕跡は、遺構確認面から確認できた。断面観察でも柱痕跡は確認できた。



棟方向は、N－3°－Wを指す南北棟であった。規模は、身舎だけでも7.42m×4.74mを測り、庇を含めると9.82m×4.74mとなる。柱心心間の距離は、図の通

りである。

遺構の切り合いは、第44よりも古く、第46号掘立柱建物跡よりも新しい。

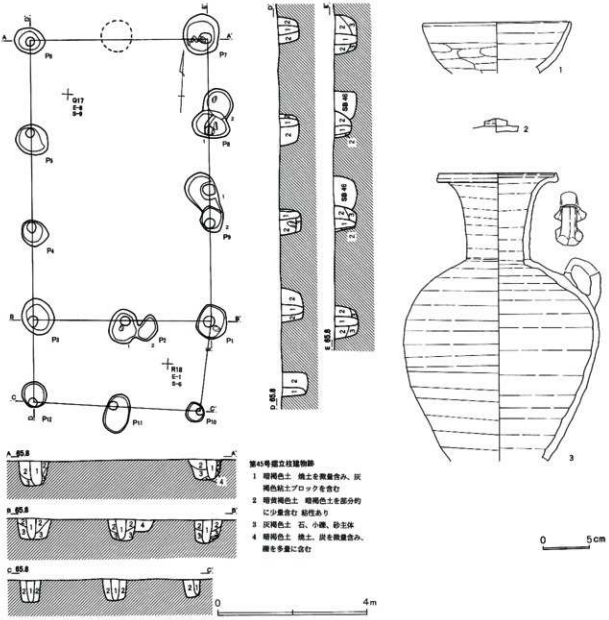
出土遺物は、柱穴から土師器坏（1）、須恵器の蓋（2）の他、わずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

1は、土師器の坏Bである。底部が欠損している。

2は、須恵器（NS）の蓋である。紐のみである。

3は、須恵器（NS）の長頸壺である。底部が欠損している。

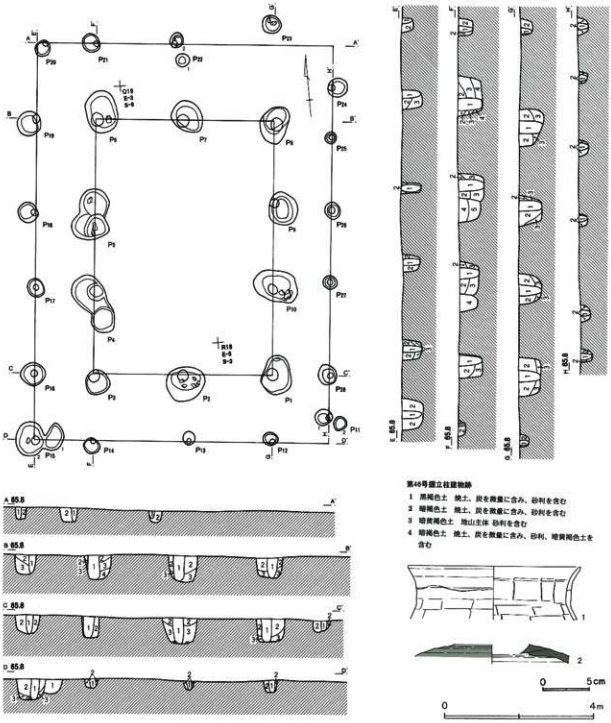
第530図　第45号掘立柱建物跡・出土遺物



第417表　第45号掘立柱建物跡出土遺物観察表

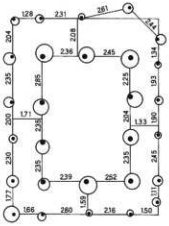
番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏B	H	15.6				B, D, E, H	普通		淡橙	10	P−8
2	蓋	NS					B, E, H	普通		橙	90	P−3
3	長頸壺	NS	12.5				B, E, H	良好		灰		P−18−4, 3

第531図　第46号掘立柱建物跡・出土遺物



第418表　第46号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪幅	色調	残存	出土位置その他
1	甕 A Ⅲ a	H	18.3				B, E, H	良好		浅黄橙	25	P－18
2	長頸壺	K					B, E, H	良好		灰白（灰強い）	60	墨書



第46号掘立柱建物跡（第531図）

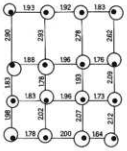
Q－18、R－17・18グリッドで確認された。遺構構築面が、砂利層の上面だったため、遺構の確認は大変困難だった。梁行き2間×桁行き3間の身舎の南に四面庇が付く建物（三間四面屋）が検出された。

身舎の柱穴は、円形の掘りかたであった。長径0.95ｍ×短径0.74ｍ×深さ0.62ｍを測り、比較的大形であった。庇の柱穴は、0.61ｍ×短径0.56ｍ×深さ0.39ｍを測り小形であった。P4・5は、第45号掘立柱建物跡に切られていた。

庇の柱は、身舎の柱と対になるように掘られていたが、やや不揃いだった。身舎・庇とも柱穴の掘りかた内には、拳大の礫や粘性の強い黒色土が、堅く充填されていた。身舎の柱痕跡は、遺構確認面から確認できた。断面観察でも柱痕跡は確認できた。

棟方向は、N－6°－Eを指す南北棟であった。規模は、身舎だけでも6.75ｍ×4.78ｍを測り、庇を含めると10.54ｍ×7.84ｍとなる。柱心心間の距離は、図の通りである。

遺構の切り合いは、第45号掘立柱建物跡、第195号竪穴式住居跡よりも古い。



出土遺物は、柱穴から土師器甕（1）、須恵器の長頸壺（2）の他、わずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

1は、土師器の甕である。胴部上位以下が欠損している。

2は、灰釉陶器の長頸壺である。胴部のみである。

第47号掘立柱建物跡（第532図）

P－16・17、Q－16・17グリッドで確認された。第47号掘立柱建物跡の周辺は、比較的遺構が疎らだが、遺構確認面は、礫層上面のため当該柱穴の確認に手間取った。梁行き3間×桁行き3間の総柱の建物（方三間倉）と推定した。

柱穴は、円形の掘りかたであった。柱痕跡は黒色土で確認しやすく、掘りかた内には、砂利を主体とした粘質土が充填されていた。柱穴は、長径0.82ｍ×短径0.65ｍ×深さ0.41ｍを測り、比較的大形であった。

棟方向は、N－1°－Wを指す。規模は6.85ｍ×5.53ｍの建物となる。柱心心間の距離は、図の通りである。

遺構の切り合いはみられないが、南側が、砂利採集によって削られている。

出土遺物は、柱穴から須恵器の耳皿（1）が出土した。

1は、灰釉陶器の耳皿である。

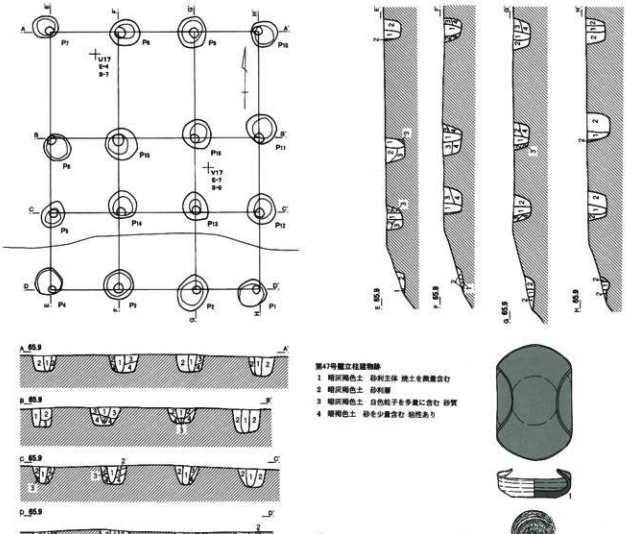
第48号掘立柱建物跡（第533図）

H－11・12グリッドで確認された。第48号掘立柱建物跡の周辺は、比較的遺構が疎らだが、遺構確認面が礫層上面のため、当該柱穴の確認に手間取った。梁行

第419表　第47号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	耳皿	K				4.7	B, E, H	良好		やや濃灰	50	

第532図　第47号掘立柱建物跡・出土遺物



き2間×桁行き3間の建物（三間屋）と推定した。

柱穴は、円形の掘りかたであった。柱痕跡は、黒色土で確認しやすく、掘りかた内には、砂利を主体とした粘質土が充填されていた。柱穴は、長径0.47m×短径0.47m×深さ0.34mを測り、やや大形であった。

棟方向は、N－2°－Eを指す南北棟であった。規模は5.47m×3.5mの建物となる。柱心間の距離は、図の通りである。

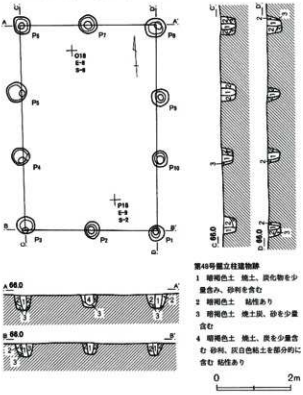
第420表　第48号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	調整	色調	残存	出土位置その他
1	高台付皿	K	13.9	2.9		6.9	B, E, H	良好		淡灰	80	O－17・墨書

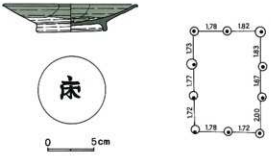
第421表　第49号掘立柱建物跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
1	にぶい赤褐	100	3.7	2.0	0.3	17.1	B 1	I a	69	

第533図　第48号掘立柱建物跡



第534図　第48号掘立柱建物跡出土遺物



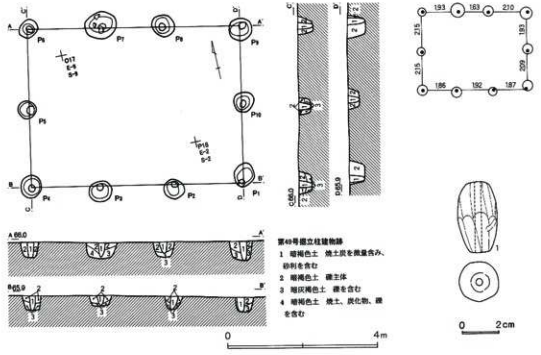
わずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

1は、灰釉陶器の高台付皿である。底部外面に墨書「床」がみられる。

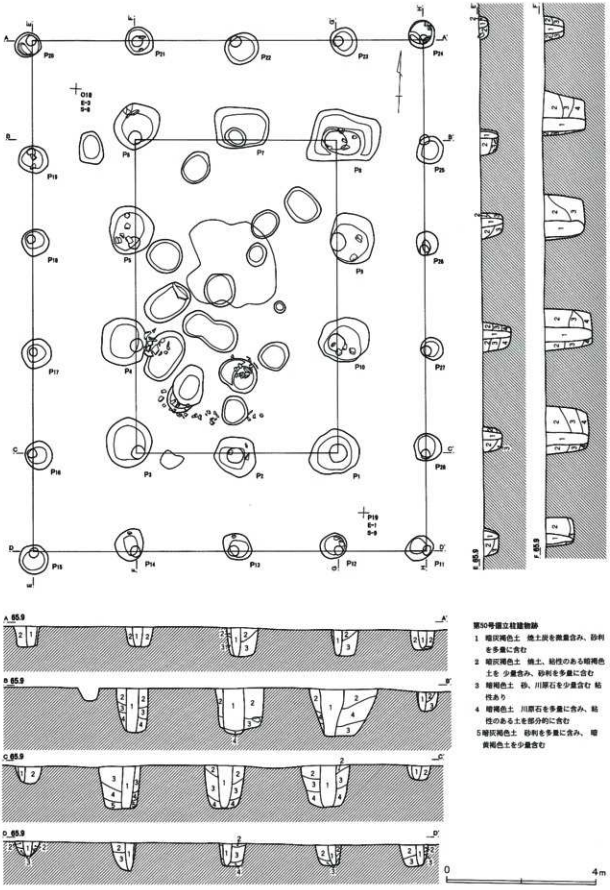
遺構の切り合いは、第49号掘立柱建物跡より新しい。

出土遺物は、柱穴から灰釉陶器高台付皿（1）の他、

第535図　第49号掘立柱建物跡・出土遺物



第536図　第50号掘立柱建物跡



第50号掘立柱建物跡

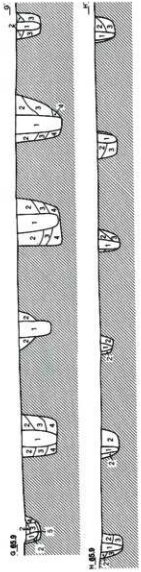
1　暗灰褐色土　焼土炭を微量含み、砂利を多量に含む

2　暗灰褐色土　焼土、粘性のある暗褐色土を少量含み、砂利を多量に含む

3　暗褐色土　砂、川原石を少量含む 粘性あり

4　暗褐色土　川原石を多量に含み、粘性のある土を部分的に含む

5 暗灰褐色土　砂利を多量に含み、暗黄褐色土を少量含む



第49号掘立柱建物跡（第535図）

O－17・18、P－17・18グリッドで確認された。第49号掘立柱建物跡の周辺は、比較的遺構が疎らだが、遺構確認面が礫層上面のため、当該柱穴の確認に手間取った。梁行き2間×桁行き3間の建物（三間屋）と推定した。

柱穴は、円形の掘りかたであった。柱痕跡は、黒色土で確認しやすく、掘りかた内には、砂利を主体とした粘質土が充填されていた。柱穴は、長径0.69m×短径0.6m×深さ0.39mを測り、やや大形であった。

棟方向は、N－79°－Wを指す南北棟であった。規模は、5.65m×4.2mの建物となる。柱心心間の距離は、図の通りである。

遺構の切り合いは、第48号掘立柱建物跡より古く、第50号掘立柱建物跡より新しい。

出土遺物は、柱穴から土錘（1）の他、わずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

1は、土錘である。

第50号掘立柱建物跡（第536図）

O－18・19、P－18・19グリッドで確認された。砂利層の上面に堆積した、大量の炭化物と土器片を含む厚さ15cmの焼土層を除去して、第50号掘立柱建物跡は確認された。この焼土層は、第50号掘立柱建物跡が、火災によって倒壊した際に形成されたと判断した。

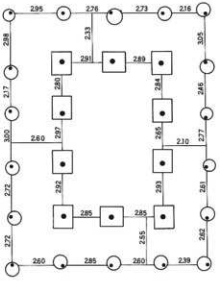
梁行き2間×桁行き3間の身舎に、四面の庇がつく建物（三間四面屋）が検出された。

身舎の内側には、径80cm前後、深さ20cm程度の円形の土壙状の落ち込みが、14基あった。とくにP29・30・31・32の中には、須恵器の大甕が据えられていた。P32の大甕などは、P4の柱にもたれ掛かるように確認された。またP38・39の周辺は、厚くこの焼土層が堆積し、図の須恵器・灰釉陶器などが、大量に出土した。地面に直接甕が据えられていた状況から、床を貼らない土間であった可能性を指摘できよう。

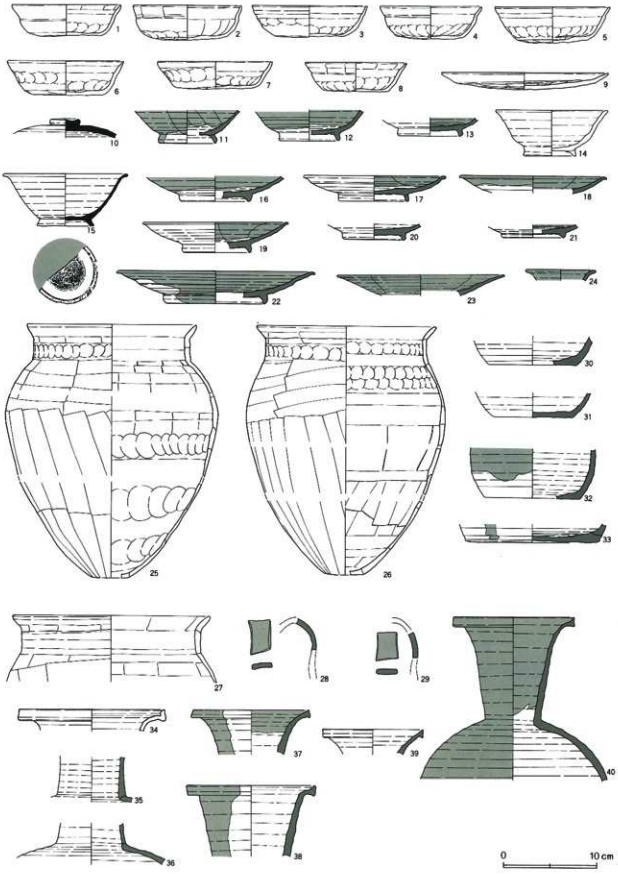
身舎の柱穴は、南北軸のやや方形の掘りかたであった。柱穴は、長径1.48m×短径1.21m×深さ1.06mを測り、大形であった。他の三間四面の建物に比較すると、掘りかたが最も深かった。

庇の柱は、身舎の柱と対になるように柱通りを揃え掘られていた。柱穴は、長径0.74m×短径0.64m×深さ0.52mを測り、小形であった。身舎・庇とも柱穴の掘りかた内には、拳大の礫や粘性の強い黒色土が、堅く充填されていた。身舎の柱痕跡は、遺構確認面からすでに確認でき、断面観察でも上部に炭化物が残っていた。

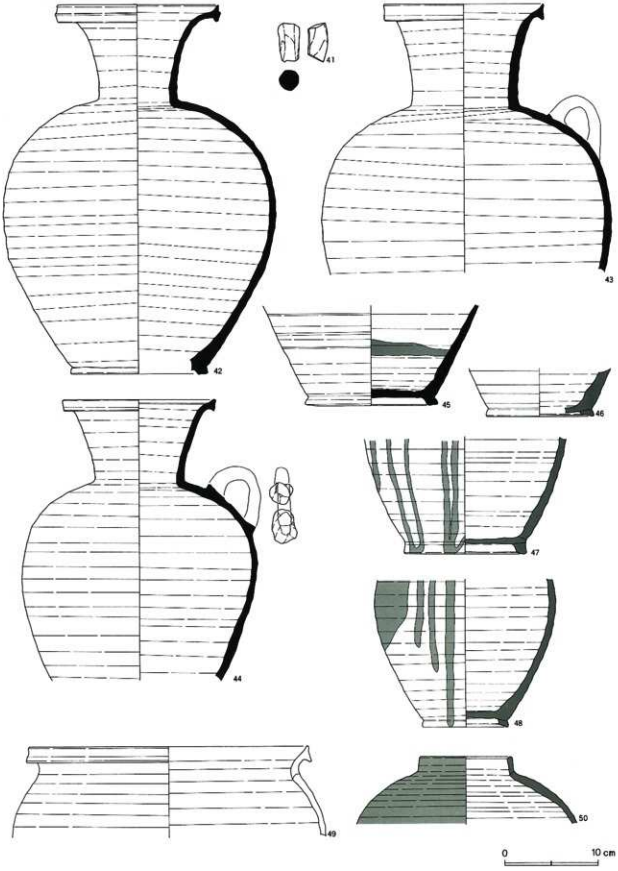
棟方向は、N－2°－Wを指す南北棟であった。規



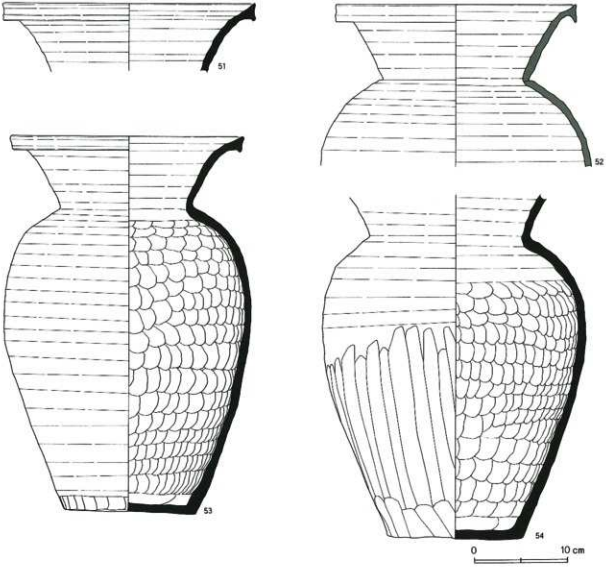
第537図　第50号掘立柱建物跡出土遺物（1）



第538図　第50号掘立柱建物跡出土遺物（2）



第539図　第50号掘立柱建物跡出土遺物（3）



模は、身舎だけでも8.36m×5.38mを測り、四面の庇を含めると13.59m×10.52mとなる。柱心心間の距離は、図の通りである。

遺構の切り合いは、第192・193号竪穴式住居跡、第49号掘立柱建物跡よりも古く、第51号掘立柱建物跡よりも新しい。

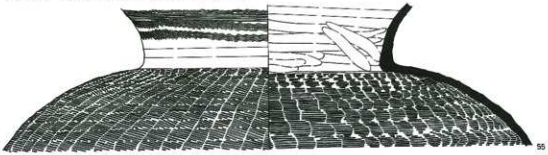
出土遺物は、焼土層中から土師器坏（1～8）皿（9）、須恵器蓋（10）、高台付椀（14・15）灰釉陶器高台付椀（11～13）高台付皿（16～21）段皿（22・23）小瓶（24）、土師器甕（25～27）、灰釉陶器把手付瓶（28～33）、須恵器・灰釉陶器長頸壺（34～48）、須恵器鉢（49）、灰釉陶器短頸壺（50）、須恵器長胴甕（51～54）、須恵器大甕（55～60）が出土した。柱穴からは、わずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

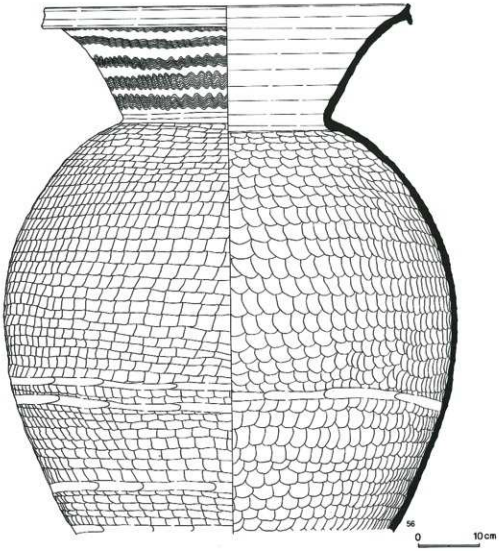
1から8は、土師器の坏Nである。9は、土師器の皿である。

10は、須恵器（S）の蓋である。14・15は、高台付椀である。14は、須恵器（NS）である。15は、須恵器（S）である。10は口縁部が欠損している。

11から13は、灰釉陶器の高台付椀である。16から21は、灰釉陶器の皿である。22・23は、灰釉陶器の段皿である。11は口縁部と底部、12・16は口縁部、18・19・22・23は底部が欠損している。13・20・21は底部のみである。

第540図　第50号掘立柱建物跡出土遺物（4）





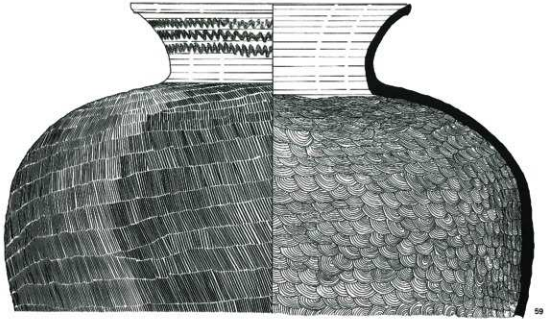
24・35から40・46から48は、灰釉陶器の長頸壺である。24・37から39は口縁部のみ、35は頸部のみ、46は底部のみである。36は口縁部と胴部中位以下、40は胴部中位以下、47・48は胴部中位以上が欠損している。

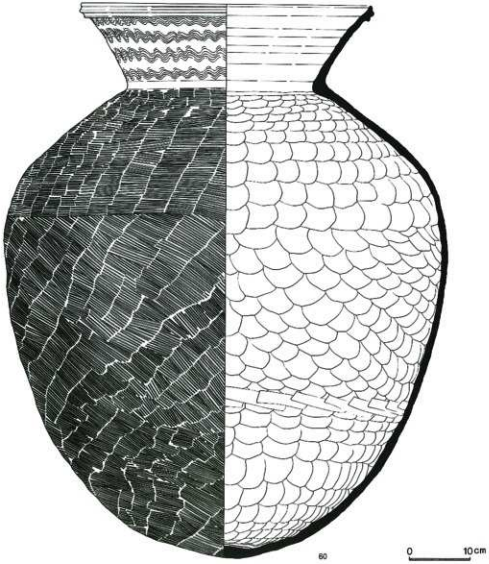
25から27は、土師器の甕である。25は、甕BⅡaである。26は、甕BⅢaである。27は、甕BⅡbである。25・26は底部、27は胴部中位以下が欠損している。

28から33は、灰釉陶器の手付瓶である。28・29は把手のみである。30から33は底部のみである。

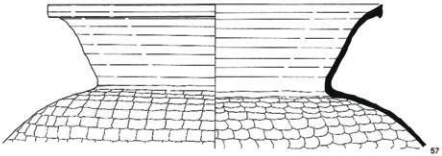
34・41から45は、長頸壺である。34は、須恵器（HS）である。41から45は、須恵器（S）である。34は口縁部のみ、41は把手のみ、45は底部のみである。42・

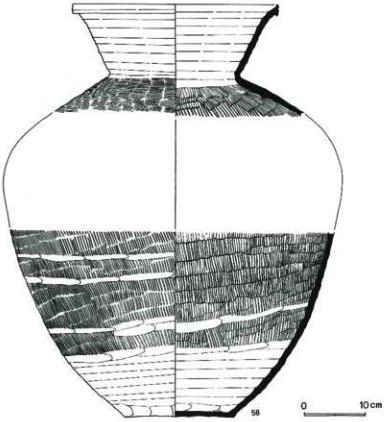
第541図　第50号掘立柱建物跡出土遺物（5）





第542図　第50号掘立柱建物跡出土遺物（6）





55から60は、須恵器（S）の大甕である。55は口縁部と胴部中位以下、56は底部、57は胴部中位以下、58は胴部中位、59は胴部下位以下が欠損している。

第51号掘立柱建物跡
（第544図）

O－19、P－19グリッドで確認された。第50号掘立柱建物跡の柱穴を調査中に、当該掘立柱建物跡の柱穴を確認した。

梁行き2間×桁行き3間の建物（三間屋）が検出された。

柱穴は、やや方形がかった円形の掘りかたであった。柱穴は、長径1.28m×短径1.06m×深さ0.95mを測り、中堀遺跡内の三間四面の建物に匹敵した大形の柱穴であった。

44は底部、43は胴部下位以下が欠損している。45は黒色の付着物が胴部内面に確認できる。

49は、土師器の鉢である。胴部中位以下が欠損している。

50は、灰釉陶器の短頸壺である。胴部中位以下が欠損している。

51・53・54は、須恵器（S）の甕である。51は口縁部のみである。54は口縁部が欠損している。

52は、灰釉陶器の甕である。胴部中位以下が欠損している。

柱痕跡は、遺構確認面からすでに確認でき、断面観察でも上部に炭化物が残っていた。

棟方向は、N－80°－Wを指す東西棟であった。規模は、身舎だけでも7.24m×4.8mを測る。

遺構の切り合いは、第50・52号掘立柱建物跡よりも古い。

出土遺物は、柱穴から須恵器坏（1）が出土した。この他、わずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

1は、須恵器（S）の椀である。底部が欠損している。

第422表　第50号掘立柱建物跡出土遺物観察表（1）

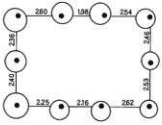
番号	器種	種別	口径	器高	鈕	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.6	3.2		6.5	B, E, H	普通		明赤橙	60	
2	坏 A Ⅳ	H	11.4	3.7		8.1	B, H	普通		暗茶	30	P－18－4
3	坏 A Ⅳ	H	12.2	3.3		7.2	B, E, H	普通		淡橙	70	P－18－2
4	坏 A Ⅳ	H	10.7	3.4		5.7	B, D, E, H	普通		暗茶褐	40	P－7
5	坏 A Ⅳ	H	12.2	3.8		7.1	B, E	普通		黄橙	90	SO－1
6	坏 A Ⅳ	H	12.3	3.6		7.2	B, D, E, H	普通		灰	30	P－28 被熱
7	坏 A Ⅳ	H	12.2	2.9		7.8	B, E, H	良好		黄橙	70	P－13
8	坏 A Ⅳ	H	10.8	3.1		6.3	B, D, E, H	普通		こげ茶	30	SO－1
9	皿	H	17.8	1.8		10.3	B, E, H	普通		黄橙	50	P－18－2
10	蓋	S					B, E, H	良好		灰白	30	P－17
11	高台付椀	K				5.9	B, E	良好		灰白	20	P－18－4 被熱
12	高台付椀	K				6.1	B, E, H	良好		灰白	10	P－8
13	高台付椀	K				6.3	B, E, H	良好		灰白	100	P－10 被熱痕
14	高台付椀	N S	11.8	4.8		5.1	B, E, H	良好		黄灰	25	P－18－4, P12
15	高台付椀	S	12.8	5.5		5.7	B, D, H	良好		褐灰	40	P－18－4, P2
16	高台付皿	K				7.1	B, E	良好		灰白（やや黄味）	30	P－18－4
17	高台付皿	K	15.0	2.7		7.2	B, E, H	良好		灰白	80	O－18－4 P7
18	高台付皿	K	15.7				B, E, H	良好		外－灰白。内－オリーブ灰	20	P－18－2
19	高台付皿	K	15.2	3.2		6.9	B, E, H	良好		灰白	50	P－18－4（SO－1 内土壌）被熱
20	高台付皿	K				6.1	B, E	良好		灰白	90	P－18－4
21	高台付皿	K				6.3	B, E, H	良好		灰白（黄味）	15	O－18
22	段皿	K	21.0	3.5		10.5	B, E, H	良好		灰白	30	P－19
23	段皿	K	17.6				B, E, H	良好		オリーブ	15	P－18－1 被熱
24	段皿	K	7.1				B, E, H	良好		オリーブ	10	P－18－1 被熱
25	甕 B Ⅱ a	H	18.0	26.9		4.0	B, E, H	普通		橙	30	P－7
26	甕 B Ⅲ a	H	19.0	26.5		4.2	B, E, H	普通		橙	口縁 100	P－7
27	甕 B Ⅱ b	H	20.8				B, E, H	良好		外－橙。内－浅黄橙	30	P－7
28	手付瓶	K					B, E, H	良好		外－オリーブ灰。内－灰白	5	P－8
29	手付瓶	K					B, E, H	良好		外－オリーブ灰。内－灰白	5	P－18－1 被熱
30	手付瓶	K				9.3	B, E, H	良好		灰白	10	P－18－4 被熱
31	手付瓶	K				8.3	B, H	良好		灰白	10	P－18－2, P10
32	手付瓶	K				10.1	B, E, I	良好		灰白	10	P－18－2
33	手付瓶	K				11.1	B, E, I	良好		灰白	15	P－18－1
34	長頸瓶	H S	15.4				B, H	普通		淡黄	5	
35	長頸瓶	K					B, E, H	良好		灰白	50	P－18－1, 3
36	長頸瓶	K					B	良好		灰白	40	P－18－2 被熱痕
37	長頸瓶	K	12.3				B, I	良好		灰白	30	P－18－2 被熱
38	長頸瓶	K	13.6				B	良好		外－黒褐。内－灰褐	20	P－18－3 被熱
39	長頸瓶	K	10.6				B, E, I	良好		外－灰白。内－オリーブ灰	20	P－18－2
40	長頸瓶	K	12.8				B, E, H	良好		暗灰黒	20	P－18－4 被熱
41	長頸瓶	S					B	良好		青灰		
42	長頸瓶	S	15.1	39.4		13.5	B, E, H	良好		灰	30	P－18－1
43	長頸瓶	S	17.0				B, E, I	良好		灰	30	P－18－4
44	長頸瓶	S	14.0				B, E, I	良好		灰	60	P－18－1, 2
45	長頸瓶	S				12.3	B	やや不良		灰白	80	P－2
46	長頸瓶	K				11.0	B	良好		灰白	15	P－18－4
47	長頸瓶	K				12.7	B	良好		灰白	20	P－18－2, 4
48	長頸瓶	K				9.0	B, E, H	良好		灰白	20	P－18－4 P2

第423表　第50号掘立柱建物跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	鐔	底径	胎土	焼成	輪幅	色調	残存	出土位置その他
49	鉢	H	29.6				B, E, H	やや不良		橙	20	P－9
50	短頸瓶	K	9.5				B, E, I	良好		灰褐	15	P－18－1, 4被熱
51	広口壺	S					B, E	普通				
52	広口壺	K				25.7	B, E, I	良好		淡灰	20	P－18－4
53	広口壺	S	24.7	39.6		14.1	B, E	普通		暗灰	50	P－18－4
54	広口壺	S				14.5	B, E, H	普通		暗灰	70	P－18－2, 3
55	大甕	S						普通		暗灰	20	
56	大甕	S	58.5				B, E, I	普通		灰	40	P－18
57	大甕	S	53.4				B, E, H	良好		淡灰	20	
58	大甕	S	32.8	65.8		17.4	B, E	不良		淡灰白	50	P－19－1
59	大甕	S	22.4				B	普通		青灰	40	
60	大甕	S	23.0	44.3			B, E, H	普通		青灰	70	Pit

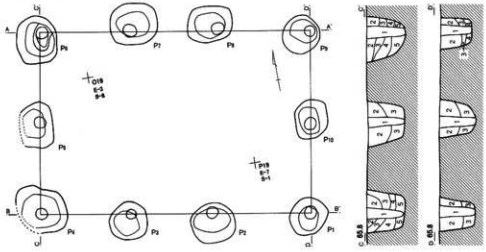
第424表　第51号掘立柱建物跡出土遺物観察表

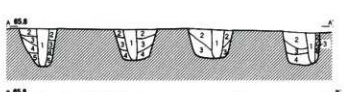
番号	器種	種別	口径	器高	鐔	底径	胎土	焼成	輪幅	色調	残存	出土位置その他
1	椀	S	13.0	3.7		7.7	B, E, G	良好		褐灰	10	P－1



第543図　第51号掘立柱建物跡出土遺物

第544図　第51号掘立柱建物跡





第51号掘立柱建物跡

1 暗褐色土　焼土、炭を微量含み、暗黄褐色土を少量含む　粘性あり
2 暗褐色土　焼土、川原石を少量含み、暗黄褐色土を微量含む　粘性あり
3 暗褐色土　暗黄褐色土を少量含む
4 暗褐色土　砂利を多量に含む、川原石を少量含む
5 暗褐色土　暗灰褐色土を少量含む　粘あり

0　4m

第52号掘立柱建物跡（第545図）

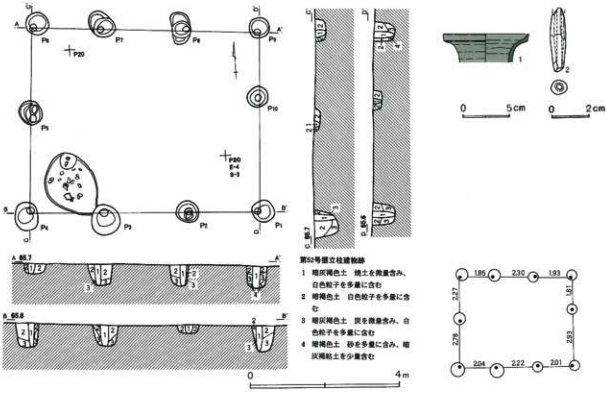
O－19・20、P－19・20グリッドで確認された。第52号掘立柱建物跡の周辺は、遺構が疎でった。しかし礫層の上面が、遺構確認面だったため、確認に手間取った。

梁行き2間×桁行き3間の建物（三間屋）が検出された。建物屋内の西南の隅に、土壙状の落ち込みがあり、大甕の破片が出土した。

柱穴は、円形の掘りかたであった。柱穴は、長径0.63m×短径0.64m×深さ0.42mを測る。

柱痕跡は、遺構

第545図　第52号掘立柱建物跡・出土遺物



第425表　第52号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪幅	色調	残存	出土位置その他
1	長頸瓶	K	8.8			9.0	B	良好		灰	25	P－28 被熱

第426表　第52号掘立柱建物跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
2	にぶい橙	80		0.8	0.3	1.9	C 2	Ⅱa	506	

確認面から確認できた。

棟方向は、N－87°－Wを指す東西棟であった。規模は、6.1m×4.74mを測る。

遺構の切り合いは、第51号掘立柱建物跡よりも新しく、第189号竪穴式住居跡よりも古く。

出土遺物は、柱穴から須恵器長頸壺（1）、土錘（2）が出土した。この他、わずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

1は、灰釉陶器の長頸壺である。口縁部のみである。

2は、土錘である。

第53号掘立柱建物跡（第546図）

Q－21、R21グリッドで確認された。第53号掘立柱建物跡の周辺は、遺構が疎らであったが、遺構確認面が、礫層の上面だったため確認に手間取った。

梁行き2間×桁行き3間の建物（三間屋）が検出された。

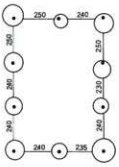
柱穴は、円形の掘りかたであった。柱穴は、長径1.07m×短径0.89m×深さ0.75mを測る大形の柱穴であった。

柱痕跡は、遺構確認面から確認でき、土層断面でも明瞭に確認できた。

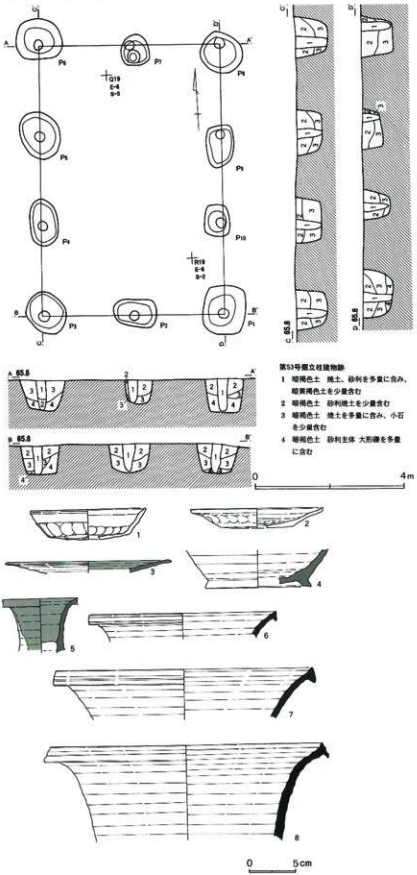
棟方向は、N－3°－Eを指す東西棟であった。規模は、7.2m×4.82mを測る。

遺構の切り合いは、みられなかった。

出土遺物は、柱穴から土師器坏（1）皿（2）、灰



第546図　第53号掘立柱建物跡・出土遺物



釉陶器段皿（3）長頸壺（4・5）、須恵器長頸壺（6～8）、が出土した。この他、わずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

1は、土師器の坏ANである。2は、土師器の皿である。1・2は底部が欠損している。

3は、灰釉陶器の高台付皿である。底部が欠損している。

4・5は、灰釉陶器の長頸壺である。4は底部のみ、5は口縁部のみである。

6から8は、須恵器（S）の広口長頸壺である。口縁部のみである。

第54号掘立柱建物跡（第547図）

M－20・21、N－20・21グリッドで確認された。柱穴は、掘りかた内の上面に充填した焼土が、砂利層の上面で円形に確認された。この上面には、炭化物と土器片を含む厚さ10cmの層があり、この中に須恵器大甕や灰釉陶器などが出土した。

梁行き2間×桁行き3間の身舎の三面に、庇がつく建物（三

第427表　第53号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	12.1	2.9		8.1	C, E, G, I	普通		黄橙	60	
2	皿	H	14.1	2.1		7.7	B	普通		黒	20	P－5
3	高台付皿	K	17.9				B	良好		外－灰白。内－オリーブ灰	10	P－4 被熱？
4	長頸瓶	K				10.2	B, E, G	良好		褐灰	30	P－1 被熱
5	長頸瓶	K	7.9				B	良好		灰白（灰強い）	10	P－6 被熱
6	広口長頸瓶	S	17.6				B, E, H	普通		青灰	20	
7	広口長頸瓶	S	27.2				B, D, E, H	普通		灰	20	
8	広口長頸瓶	S	28.6				B, I	普通		青灰	10	

間三面屋）が検出された。

身舎の内外には、径80cm前後、深さ20cm程度の円形の土壙状の落ち込みが、8基あった。とくにP22・28の中には、須恵器の大甕が据えられていた。少なくとも庇には、地面に直接甕が据えられていた状況から、床を貼らない土間であった可能性がある。また南庇の掘りかた・柱痕跡が大きく、他の庇付き建物と共通した構造ではない。

身舎の柱穴は、南北軸のやや方形の掘りかたであった。柱穴は、長径1.36m×短径1.17m×深さ1.09mを測り、大形であった。大形の柱穴内には、遺跡内の他の場所で火災を受け、倒壊した建物の炭化材や焼土が充填されていた。とくにP4の掘りかた内からは、大量の灰釉陶器が出土した。この灰釉陶器の出土は、火災による廃材処理と推定した。

庇の柱は、身舎の柱と対になるように柱通りを揃え掘られていた。柱穴は、長径0.74m×短径0.64m×深さ0.52mを測り、小形のものと身舎の柱と同規模の大形のものがあった。庇とも柱穴の掘りかた内には、拳大の礫や粘性の強い黒色土が、堅く充填されていた。

棟方向は、N－3°－Eを指す南北棟であった。規模は、身舎だけでも8.36m×5.38mを測り、四面の庇を含めると13.59m×10.52mとなる。柱心心間の距離は、図の通りである。

遺構の切り合いは、区画溝と接するが、前後関係ははっきりしなかった。

出土遺物は、焼土層中・柱穴内から土師器坏（1～8）須恵器坏（9・13）高台付椀（10）高台付皿（12～16）、灰釉陶器高台付椀（17～46）高台付皿（47～69）段皿（70～77）耳皿（78・79）三足盤（80）、小瓶（81）、長頸壺（82～85）、手付瓶（86・87）土師器鉢（88・89）甕（91）、須恵器鉢（90）甕（92・93）、土錘（94～170）が出土した。

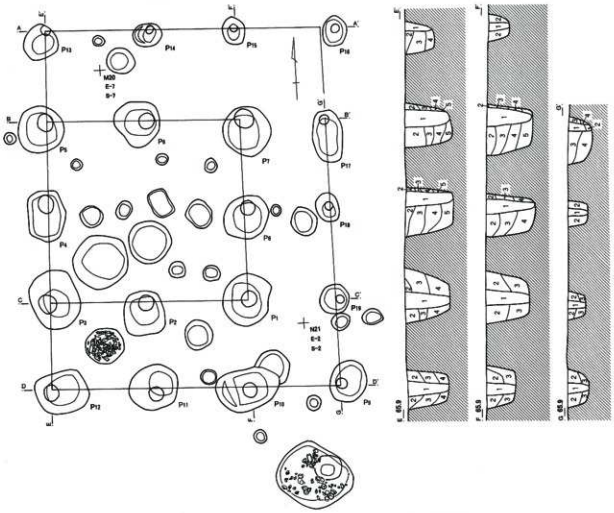
1から8は、土師器の坏AⅣである。14は、土師器の高台付皿である。1・3・6・8は底部が欠損している。

9・13は、椀である。9は、須恵器（S）である。13は、須恵器（NS）である。10は、須恵器（NS）の高台付椀である。11は、須恵器（S）の皿である。底部外面に墨書「南」がみられる。12・15・16は、高台付皿である。12・15は、須恵器（NS）である。16は、須恵器（HS）である。9は底部が欠損している。

17から46は、灰釉陶器の高台付椀である。47から69は、灰釉陶器の高台付皿である。49は底部外面に墨書がみられる。文字は判読できない。70から77は、灰釉陶器の段皿である。70は底部外面に墨書がみられる。文字は判読できない。78・79は、灰釉陶器の耳皿である。80は、灰釉陶器の三足盤である。28・30・31・32・41・42から44・65・66・68・69・73は底部、45は口縁部が欠損している。46は底部のみである。

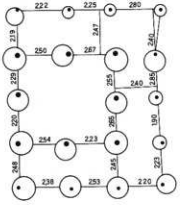
81は、灰釉陶器の小瓶である。82から85は、灰釉陶器の長頸壺である。86・87は、灰釉陶器の手付瓶である。81は把手と胴部中位以下、82は口縁部と胴部中位、83・84は口縁部が欠損している。85は底部のみ、86・

第547図　第54号掘立柱建物跡

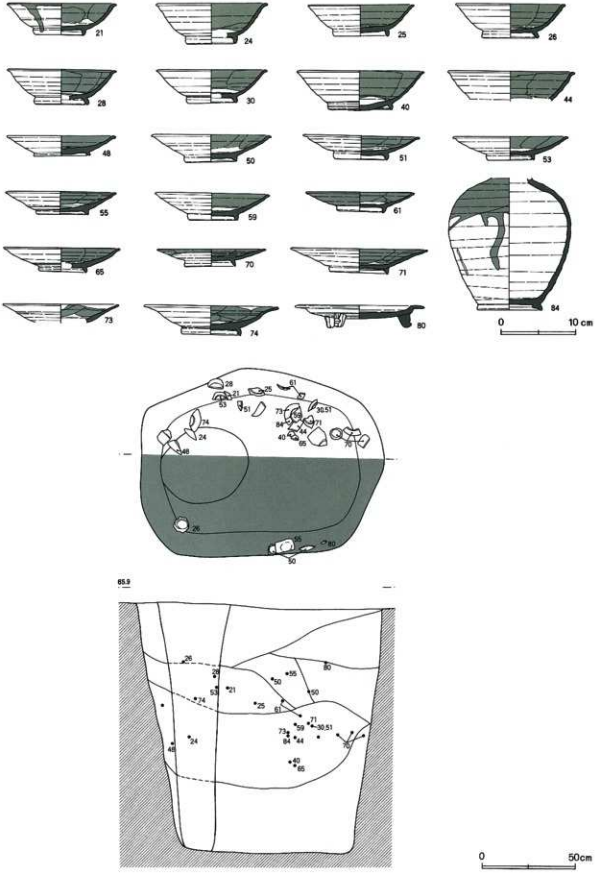


第54号掘立柱建物跡

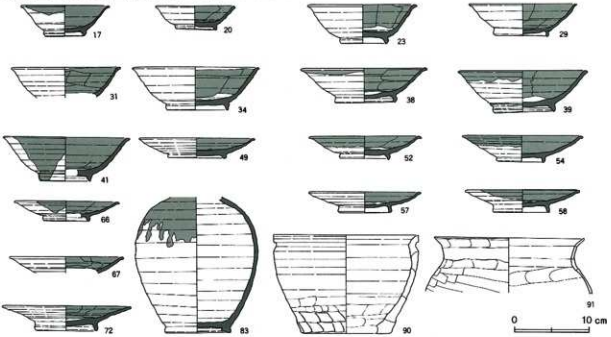
1　暗褐色土　焼土を多量に含み、川原石を少量含む
2　暗褐色土　焼土、砂利を多量に含む
3　暗褐色土　焼土を多量に含む
4　暗褐色土　暗灰褐の粘質土を部分的に少量含む　粘性あり
5　暗灰褐色土　砂利主体 焼土、暗褐色土を少量含む

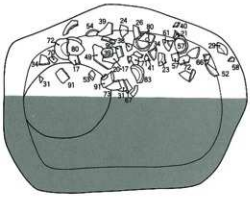


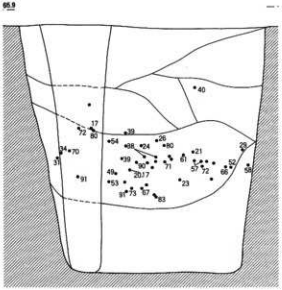
第548図　第54号掘立柱建物跡出土遺物・出土状態（1）



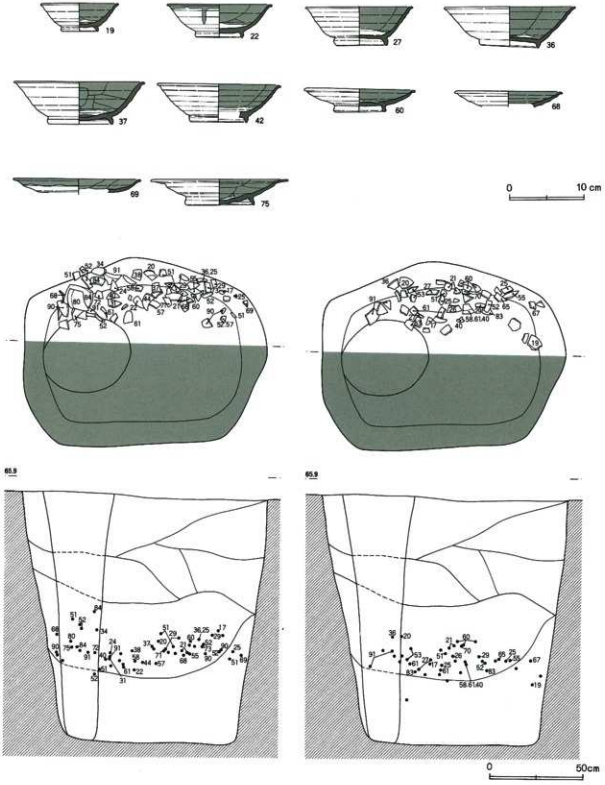
第549図　第54号掘立柱建物跡出土遺物・出土状態（2）



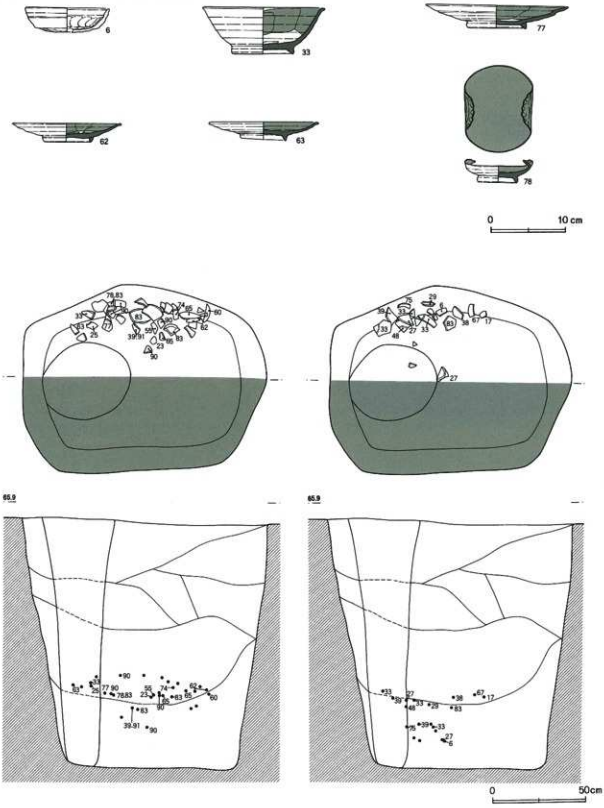




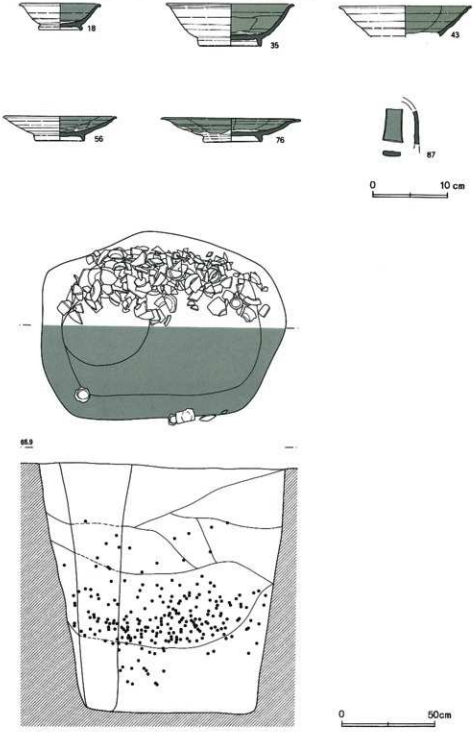
第550図　第54号掘立柱建物跡出土遺物・出土状態（3）



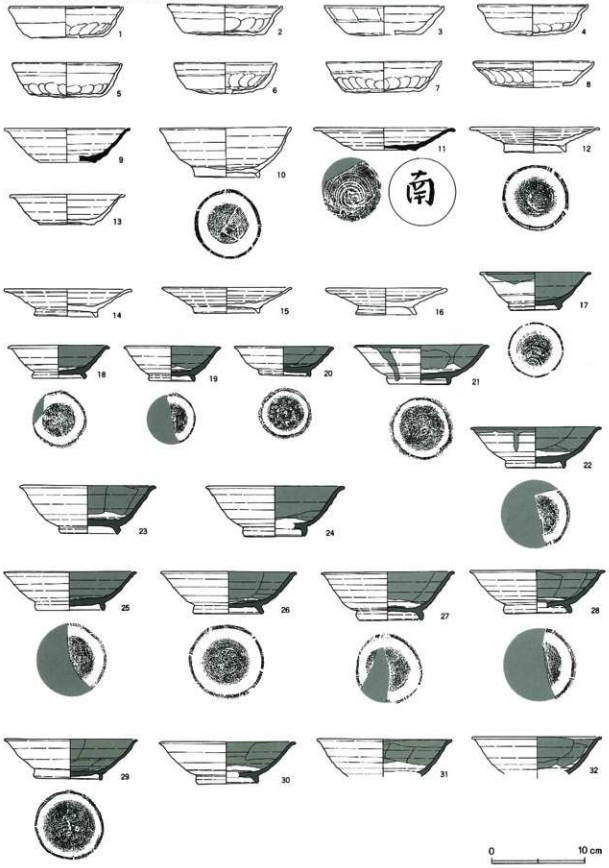
第551図　第54号掘立柱建物跡出土遺物・出土状態（4）



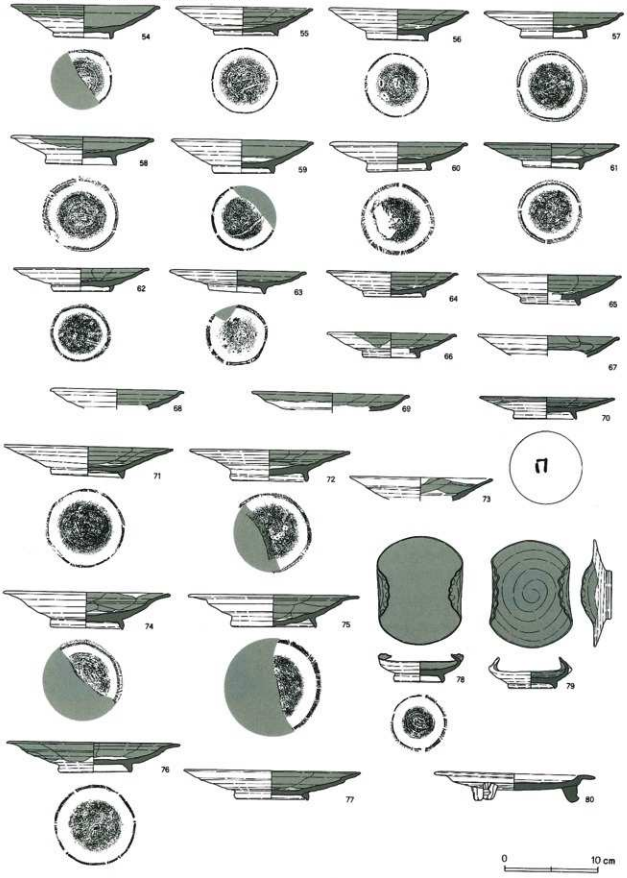
第552図　第54号掘立柱建物跡出土遺物・出土状態（5）



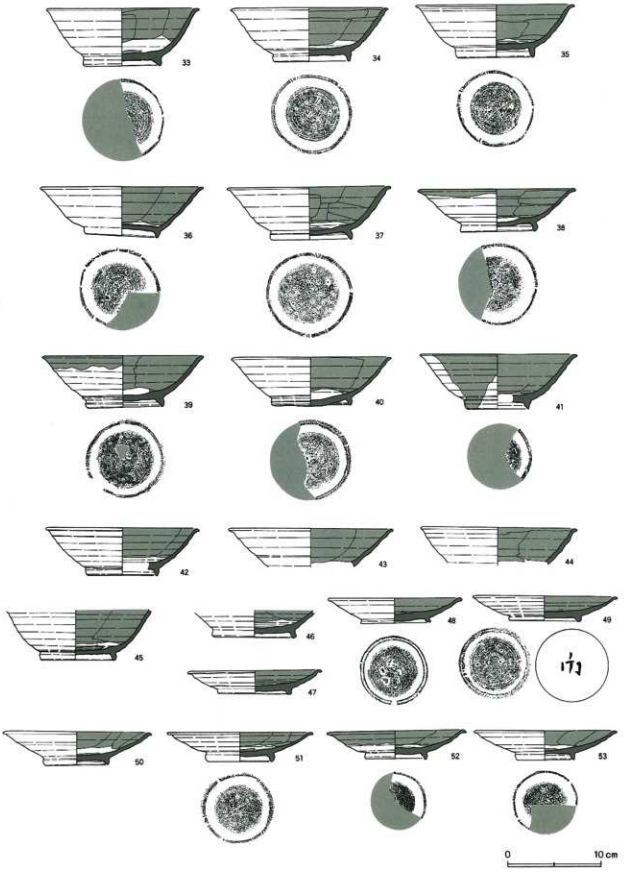
第553図　第54号掘立柱建物跡出土遺物（1）



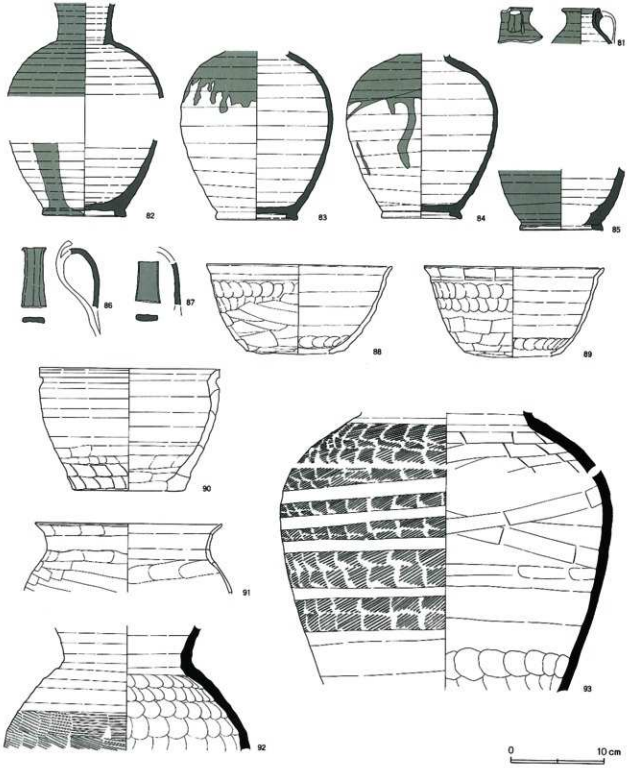
第554図　第54号掘立柱建物跡出土遺物（2）



第555図　第54号掘立柱建物跡出土遺物（3）



第556図　第54号掘立柱建物跡出土遺物（4）



87は把手のみである。

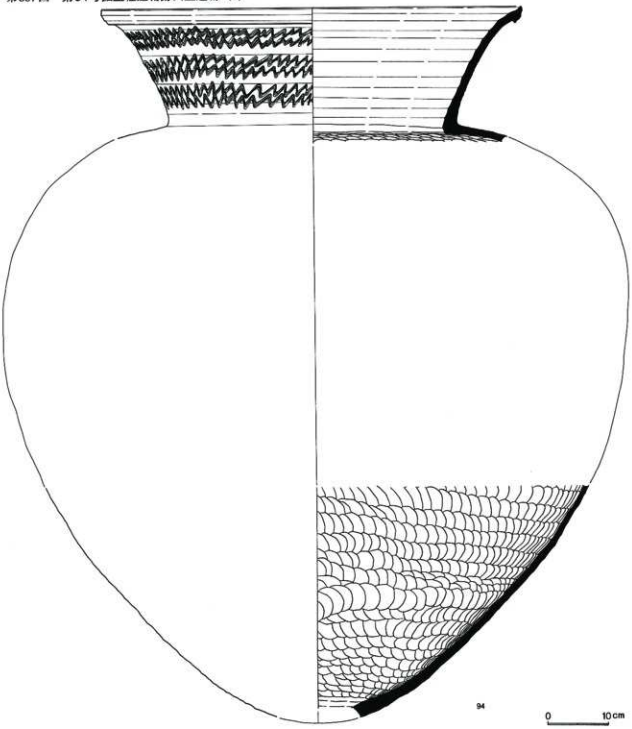
88・89は、土師器の鉢である。底部が欠損している。

90は、須恵器（ＨＳ）の鉢である。底部が欠損している。

91は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損している。

92・93は、須恵器（Ｓ）の甕である。92は口縁部と胴部中位以下、93は口縁部と底部が欠損している。

第557図　第54号掘立柱建物跡出土遺物（5）



94は、須恵器（S）の大甕である。胴部上位から中位が欠損している。

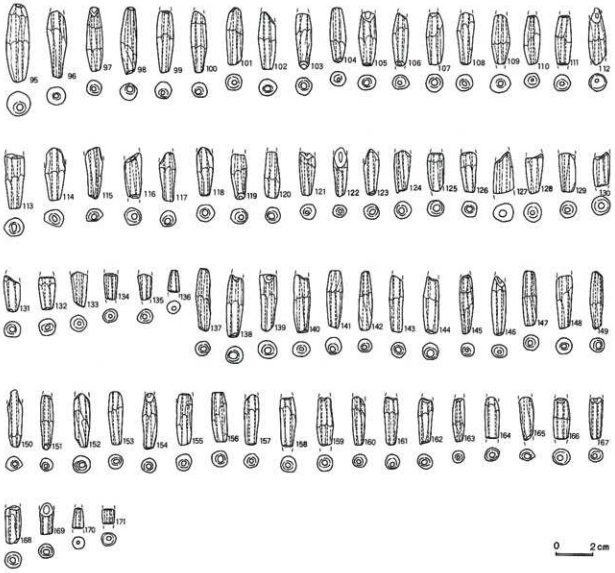
95から171は、土錘である。

第55号掘立柱建物跡（第559図）

O－20・21、P－20・21グリッドで確認された。第55号掘立柱建物跡は、柱穴の掘りかたの上面に充填した焼土が、砂利層の上面で円形に並んで確認された。この焼土層は、第50号掘立柱建物跡等が、火災によって倒壊した際に形成されたものと判断した。

梁行き2間×桁行き3間の身舎に、四面の庇がつく建物（三間四面屋）が検出された。

第558図　第54号掘立柱建物跡出土遺物（6）



第428表　第54号掘立柱建物跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸線	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.9	3.3		7.7	B, E, H	普通		橙	30	P－5
2	坏 A Ⅳ	H	12.2	3.1		6.2	B	普通		黄橙	100	SK726
3	坏 A Ⅳ	H	12.7	3.1		7.7	B, E, H	普通		橙	30	SK726
4	坏 A Ⅳ	H	11.7	3.3		7.4	B, E, H	普通		白橙	40	SK726
5	坏 A Ⅳ	H	11.6	3.6		5.4	B, E, H	普通		黄橙	80	SK726
6	坏 A Ⅳ	H	11.0	3.2		5.9	B, E, I	普通		橙	40	P－5
7	坏 A Ⅳ	H	12.3	3.2		7.0	B, E, H	普通		黄橙	70	SK726
8	坏 A Ⅳ	H	12.7	2.8		8.1	B, E, H	普通		こげ茶	20	P－5
9	椀	S	13.2	3.6		6.1	B, E	良好		灰	20	SK726 覆土
10	高台付椀	N S	13.9	5.2		6.7	B, E, H	普通		灰白	70	SK726 覆土
11	皿	S	14.8	2.3		6.6	B, D, E	普通		褐灰	30	SK726 覆土墨書
12	高台付皿	N S	13.6	2.7		6.4	B, E, H	普通		にぶい黄橙	50	SK726
13	椀	N S	12.1	5.2		3.8	B, E, G	良好		浅黄	100	
14	高台付皿	H	13.6	2.8		6.3	B, D, E, H	普通		橙	50	P－10, P－29

第429表　第54号掘立柱建物跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
15	高台付皿	N S	13.5	2.7		6.6	B, I	良好		灰白	50	P－12
16	高台付皿	H S	12.6	2.8		6.1	B, E, H	普通		褐灰	40	P－22, P－29
17	高台付椀	K	11.5	4.1		5.1	B	良好		淡灰緑	80	P－5
18	高台付椀	K	10.1	3.5		5.5	B, E, H	良好		淡緑灰	90	P－5
19	高台付椀	K	9.9	3.7		4.7	B	良好		淡灰緑	50	P－5
20	高台付椀	K	10.2	3.1		5.2	B, E, I	良好		淡灰緑	100	P－5
21	高台付椀	K	14.0	4.1		6.3	B, E, H	良好		淡黄灰	90	P－5
22	高台付椀	K	13.6	4.4		6.0	B, C, E, H	良好		淡緑灰	40	P－5
23	高台付椀	K	14.0	5.1		6.1	B	良好		明灰緑	50	P－5
24	高台付椀	K	14.2	5.3		6.3	B, E, H	良好		暗灰緑	20	P－5
25	高台付椀	K	13.9	4.1		7.1	B, E, H	良好		淡灰緑	60	P－5
26	高台付椀	K	14.1	4.5		7.1	B, E, H	良好		淡黄灰	80	P－5 被熱痕
27	高台付椀	K	14.0	5.1		6.5	B, E, I	良好		淡灰緑	60	P－5
28	高台付椀	K	13.4	4.6		6.9	B, E, H	良好		淡緑灰	40	P－5
29	高台付椀	K	14.1	4.3		6.9	B, E, H	良好		淡緑灰	70	P－5
30	高台付椀	K	14.1	4.5		6.3	B, E, I	良好		淡灰緑	30	P－5
31	高台付椀	K	14.2	5.0		6.2	G, H, I	良好		濃灰緑	口縁部のみ	P－5
32	高台付椀	K	13.5	5.0		5.5	E, G, H	良好		淡灰緑	30	P－5
33	高台付椀	K	15.7	6.1		7.9	B, E, I	良好		淡灰緑	50	P－5 破片となってから被熱
34	高台付椀	K	16.3	5.7		8.0	B, E	良好		淡灰	80	P－5
35	高台付椀	K	16.6	5.6		7.9	D, G	良好		淡灰緑	40	P－5 窯印あり
36	高台付椀	K	17.1	5.4		7.6	B, E, I	良好		淡灰褐	50	P－5
37	高台付椀	K	17.1	5.6		8.4	B, E, H	良好		淡灰緑	90	P－5
38	高台付椀	K	16.4	4.5		7.8	B	良好		淡灰緑	50	P－5
39	高台付椀	K	16.6	5.5		7.9	B, C, D, G	良好		淡灰緑	70	P－5
40	高台付椀	K	16.4	5.2		8.4	B, C, E, H	良好		淡灰緑	30	P－5
41	高台付椀	K	16.4	5.8		6.5	B, C, E, I	良好		淡灰緑	40	P－5 被熱
42	高台付椀	K	15.9	5.0		7.4	B, C, G	良好		灰白	30	P－4, 5
43	高台付椀	K	17.3	4.9		8.9	B, C, H	良好		淡灰緑	33	P－5
44	高台付椀	K	16.3				B, C, G	良好		淡灰緑	30	P－5
45	高台付椀	K	16.1	5.8		7.6	B, E	良好		灰白	30	SK－631 被熱痕跡なし
46	高台付椀	K				8.2	C, E	良好		灰白	20	P－29 被熱
47	高台付皿	K	13.4	2.5		7.4	B, E, G	良好		灰白	90	P－29 被熱痕跡あり
48	高台付皿	K	14.1	2.7		7.3	D	良好		淡灰緑	100	P－5
49	高台付皿	K	15.0	2.6		7.4	B, E, I	良好		淡緑灰	80	P－5 墨書
50	高台付皿	K	15.2	3.2		6.2	B, C, H	良好		淡緑灰	90	P－5
51	高台付皿	K	15.3	3.1		6.8	B	良好		淡緑灰	100	P－5
52	高台付皿	K	14.3	2.9		6.4	B, D	良好		濃灰緑	70（底部大半欠損）	P－5
53	高台付皿	K	14.8	3.1		6.1	B, I	良好		淡灰緑	50	P－5
54	高台付皿	K	15.5	3.5		5.9	B, E, I	良好		淡緑灰	50	P－5
55	高台付皿	K	14.0	3.0		6.7	B, E, G	良好		淡緑灰	70	P－5 ヘラ記号？
56	高台付皿	K	14.6	3.3		6.3	B, E, I	良好		淡灰緑	80	P－5
57	高台付皿	K	14.4	2.8		6.7	B, E	良好		濃灰緑	90	P－5 ヘラ記号（窯印）
58	高台付皿	K	14.8	2.9		7.3	B, E, I	良好		やや濃緑灰	100	P－5
59	高台付皿	K	14.7	3.6		6.4	B, E, I	良好		暗灰	50	P－5 外面被熱の可能性
60	高台付皿	K	14.2	3.2		6.4	B, I	良好		淡灰緑	80	P－5
61	高台付皿	K	14.2	2.7		5.8	B, E	良好		淡緑灰	90	P－5
62	高台付皿	K	14.2	2.5		5.8	B, E, I	良好		淡灰緑	100	P－5 黒斑状シミ
63	高台付皿	K	14.1	2.4		5.8	B, E	不良		濃緑灰	80	P－5 被熱
64	高台付皿	K	13.8	2.6		6.3	B, E, I	良好		淡灰白	50	P－4 被熱
65	高台付皿	K	15.2	3.1		6.0	B, I	良好		淡灰緑	80	P－5
66	高台付皿	K	13.3	2.6		5.9	B, C, E, I	良好		淡灰緑	50	P－5

第430表　第54号掘立柱建物跡出土遺物観察表（3）

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪鐘	色調	残存	出土位置その他
67	高台付皿	K	14.9	3.4		5.9	N, E, I	良好		淡灰緑	40（口縁部のみ）	P－5
68	高台付皿	K	13.8				B, E, G, I	良好		灰白	30	P－5 被熱痕跡明瞭
69	高台付皿	K	16.6				B, I	良好		淡灰緑	33（高台部欠損）	P－5
70	段皿	K	14.2	2.3		6.5	B	良好		淡灰緑	100	P－5 墨書らしき痕跡
71	段皿	K	18.0	3.1		7.6	B	良好		濃うぐいす	90	P－5
72	段皿	K	16.8	3.3		7.9	B, E	良好		淡灰緑	70	P－5
73	段皿	K	15.0	3.5		4.3	B	良好		淡灰緑	30（口縁部のみ）	
74	段皿	K	17.5	3.8		7.4	B, E, I	良好		淡灰緑	40	P－5
75	段皿	K	18.0	3.4		8.8	B, E, I	良好		濃灰緑	33	P－5
76	段皿	K	18.0	3.3		7.4	B, I	良好		やや濃灰	100	P－5
77	段皿	K	18.7	3.0		7.5	B, I	良好		淡灰緑	30（口縁から底部あり）	P－5
78	耳皿	K				5.0	B, E, I	良好		淡緑灰	100	P－5
79	耳皿	K	1.8			4.8	C, E, H	良好		灰白	90	SK726
80	三足盤	K	15.5	3.0			B	良好		淡灰褐	90	P－5
81	小瓶	K	3.6				B, D	良好		灰白	20	P－1 被熱激しい
82	長頸壺	K				8.2	B, D, J	良好		灰白	20	P－4, P－29
83	長頸壺	K				8.5	B	普通		淡灰褐	胴部のみ	P－5
84	長頸壺	K				8.5	B, E, I	良好		暗灰	胴部のみ	P－5
85	長頸壺	K				8.6	B, E, I	良好		灰白	20	P－29 被熱
86	手付瓶	K	7.0				B	良好		灰白		P－5 被熱激しい
87	手付瓶	K					B, D, J	良好		オリーブ灰		P－5 被熱激しい
88	鉢	H	19.7				B, E, G, I	普通		橙	30	P－29
89	鉢	H	19.2	9.6		8.1	B	普通		赤橙	20	P－29
90	鉢	HS	19.3	13.0		11.8	B	良好		灰白	50	P－5
91	甕 B Ⅲ c	H	19.8				B, E, I	良好		淡橙	100	P－5
92	広口壺	S					B, E, I	良好		青灰	20	P－4, P－29
93	広口壺	S					B, E, I	良好		灰白	20	P－4
94	大甕	S					B, D	良好		灰	80	

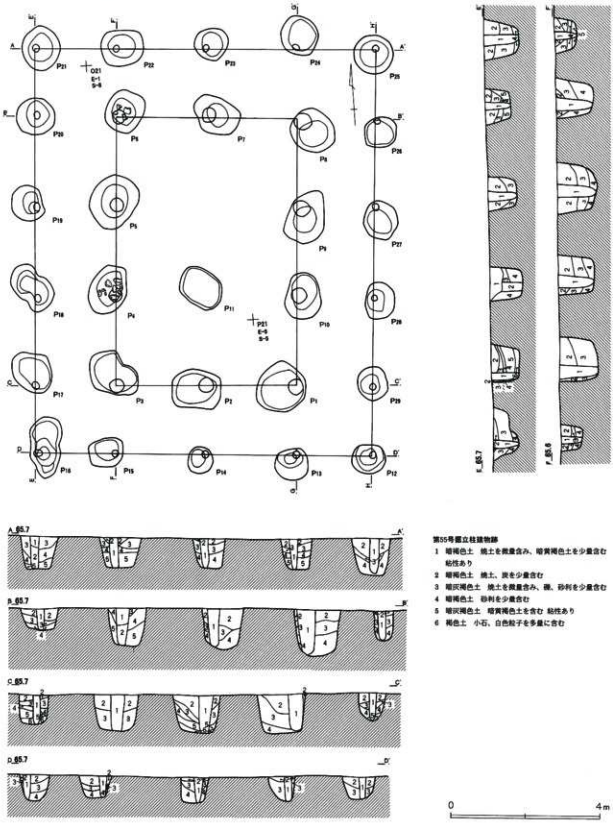
第431表　第54号掘立柱建物跡出土土錘観察表（1）

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
95	橙	100	4.2	1.2	0.3	6.8	C 2	Ⅰa	507	
96	にぶい橙	70		1.0	0.2	2.4	C 2	Ⅱb	508	
97	灰褐	100	3.4	0.8	0.2	2.2	C 2	Ⅰc	509	
98	にぶい褐	100	3.6	0.9	0.3	2.1	C 2	Ⅱa	510	
99	にぶい黄褐	80		0.9	0.2	2.1	C 2	Ⅱb	511	
100	にぶい橙	80		0.8	0.3	1.9	C 2	Ⅰc	512	
101	にぶい橙	100	3.0	0.9	0.3	2.4	C 2	Ⅱb	513	
102	褐灰	60		1.0	0.3	2.1	C 2	Ⅱa	514	
103	にぶい橙	60		0.9	0.3	1.7	C 2	Ⅰc	515	
104	にぶい褐	100	2.9	0.8	0.2	1.6	C 2	Ⅰa	516	
105	にぶい橙	60		1.0	0.3	1.9	C 2	Ⅱb	517	
106	にぶい橙	70		0.9	0.2	1.9	C 2	Ⅱb	518	
107	にぶい橙	80		0.8	0.3	2.0	C 2	Ⅱa	519	
108	にぶい褐	50		0.9	0.3	1.7	C 2	Ⅱa	520	
109	にぶい褐	60		1.0	0.2	2.4	C 2	Ⅷ	521	
110	褐灰	90		0.8	0.1	1.5	C 2	Ⅰa	522	
111	にぶい褐	80		0.8	0.2	1.8	C 2	Ⅰb	523	
112	にぶい橙	40		0.9	0.2	2.1	C 2	Ⅷ	524	
113	にぶい黄橙	40		1.1	0.4	2.6	C 2	Ⅲa	525	

第432表　第54号掘立柱建物跡出土土錘観察表（2）

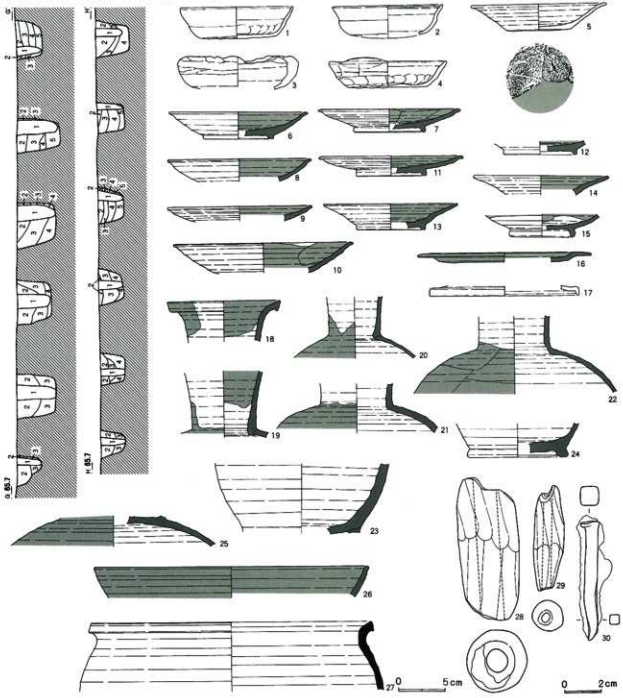
番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
114	灰　　褐	40		1.0	0.3	2.3	C 2	Ⅳ b	526	
115	にぶい橙	30			0.3	1.1	C 2	Ⅳ b	527	
116	にぶい橙	40		0.9	0.3	1.8	C 2	Ⅲ b	528	
117	にぶい褐	50		0.8	0.3	1.4	C 2	Ⅱ b	529	
118	褐　　灰	50		0.9	0.3	1.9	C 2	Ⅱ b	530	
119	にぶい褐	40		0.9	0.3	1.3	C 2	Ⅲ b	531	
120	にぶい褐	90		0.8	0.3	1.4	C 2	Ⅱ b	532	
121	にぶい褐	40		0.8	0.2	1.3	C 2	Ⅱ a	533	
122	褐　　灰	40		0.7	0.2	1.2	C 2	Ⅱ a	534	
123	にぶい褐	30		0.8	0.3	1.0	C 2	Ⅲ a	535	
124	黒　　褐	30		0.9	0.3	1.3	C 2	Ⅲ b	536	
125	にぶい褐	40		0.9	0.4	1.2	C 2	Ⅶ	537	
126	にぶい橙	40		0.9	0.3	1.3	C 2	Ⅲ a	538	
127	にぶい褐	30		1.0	0.4	1.5	C 2	Ⅳ b	539	
128	灰　　褐	30		1.0	0.2	1.4	C 2	Ⅲ a	540	
129	にぶい褐	50		0.9	0.3	1.5	C 2	Ⅲ a	541	
130	にぶい褐	30		0.9	0.3	1.2	C 2	Ⅳ a	542	
131	にぶい褐	30		0.8	0.3	1.1	C 2	Ⅲ a	543	
132	にぶい褐	30		0.9	0.2	1.0	C 2	Ⅳ a	544	
133	にぶい橙	30		0.9	0.2	1.0	C 2	Ⅳ b	545	
134	にぶい橙	20		0.8	0.2	0.7	C 2	Ⅶ	546	
135	にぶい褐	20		0.8	0.2	0.6	C 2	Ⅳ b	547	
136	にぶい褐	10		0.7	0.2	0.5	C 3	Ⅳ b	670	
137	灰　　褐	100	3.4	0.8	0.3	1.9	C 3	Ⅰ a	671	
138	にぶい黄橙	80		0.9	0.4	2.3	C 3	Ⅱ b	672	
139	にぶい橙	60		1.0	0.3	2.1	C 3	Ⅱ b	673	
140	にぶい褐	80		0.9	0.2	2.4	C 3	Ⅰ a	674	
141	にぶい褐	100	3.1	0.8	0.3	2.1	C 3	Ⅰ a	675	
142	にぶい褐	100	3.2	0.7	0.2	1.5	C 3	Ⅰ b	676	
143	にぶい褐	100	3.0	0.8	0.3	1.4	C 3	Ⅰ c	677	
144	にぶい橙	70		0.8	0.3	1.8	C 3	Ⅰ c	678	
145	にぶい橙	90		0.7	0.2	1.5	C 3	Ⅰ c	679	
146	にぶい橙	80		0.8	0.2	1.8	C 3	Ⅱ b	680	
147	にぶい橙	100	2.9	0.8	0.2	1.5	C 3	Ⅰ a	681	
148	にぶい赤褐	60		0.8	0.3	2.2	C 3	Ⅱ a	682	
149	にぶい黄褐	70		0.8	0.3	1.6	C 3	Ⅱ a	683	
150	にぶい橙	40			0.3	1.1	C 3	Ⅴ b	684	
151	にぶい橙	60		0.7	0.2	1.2	C 3	Ⅱ b	685	
152	にぶい褐	50		0.9	0.3	1.8	C 3	Ⅱ b	686	
153	灰　　褐	100	2.8	0.8	0.3	1.5	C 3	Ⅰ b	687	
154	黒　　褐	90		0.7	0.2	1.5	C 3	Ⅱ b	688	
155	にぶい橙	60		0.9	0.2	1.6	C 3	Ⅰ b	689	
156	黒　　褐	100	2.6	0.8	0.3	1.9	C 3	Ⅰ a	690	
157	にぶい褐	50		0.8	0.2	1.4	C 3	Ⅱ a	691	
158	褐　　灰	70		0.8	0.2	1.6	C 3	Ⅱ b	692	
159	にぶい褐	60		0.7	0.3	1.6	C 3	Ⅰ b	693	
160	にぶい橙	50		0.7	0.2	1.2	C 3	Ⅰ c	694	
161	にぶい褐	50		0.7	0.2	1.5	C 3	Ⅱ b	695	
162	にぶい橙	40		0.8	0.2	1.2	C 3	Ⅱ b	696	
163	にぶい褐	60		0.6	0.1	0.7	C 3	Ⅱ	697	
164	にぶい褐	40		0.8	0.3	1.1	C 3	Ⅶ	698	
165	灰　　褐	30			0.3	0.7	C 3	Ⅶ	699	
166	にぶい橙	30		0.9	0.3	1.4	C 3	Ⅶ	700	
167	褐　　灰	40		0.8	0.2	1.1	C 3	Ⅱ a	701	

第559図　第55号掘立柱建物跡



身舎の内側には、径1m、深さ20cmほどの柱穴があり、身舎の補助柱穴と考えられる。身舎の柱穴は、南北軸のやや方形の掘りかたであった。柱穴は、長径1.3m×短径1.09m×深さ1.08mを測り、大形であった。

第560図　第55号掘立柱建物跡出土遺物

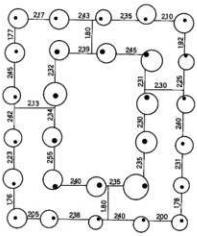


第433表　第54号掘立柱建物跡出土土錘観察表（3）

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
168	にぶい褐	30		0.9	0.3	1.2	C 3	Ⅲ b	702	
169	にぶい橙	20		0.8	0.3	0.7	C 3	Ⅳ a	703	
170	にぶい褐	10		0.6	0.1	0.4	C 3	Ⅴ a	704	
171	にぶい褐	10		0.8	0.2	0.4	C 3	Ⅶ	705	

柱痕跡は、遺構確認面から確認することができ、土層断面でも立ち腐れ状態を確認することができた。

庇の柱は、身舎の柱と対になるように柱通りを揃え掘られていた。柱穴は、長径1m×短径0.9m×深さ1.05mを測り、身舎の柱穴に匹敵し最大であった。身舎・庇とも柱穴の掘りかた内の上層には、焼土・炭化物、そして大量の土器片が混入していた。また掘りかたの下層には、拳大の礫や粘性の強い黒色土が、堅く充填されていた。身舎の柱痕跡は、遺構確認面からすでに確認でき、断面観察でも上部に炭化物が残っていた。



第434表　第55号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	穿孔	色調	残存	出土位置その他
1	坏C	H	11.6	3.2		7.2	B, D	普通		淡橙	40	
2	坏C	H	11.7	3.5		6.5	B, D, E	普通		淡橙	20	P−3
3	坏A	H	8.5				B, D	普通		淡橙	21	P−26
4	坏AI	H	12.5	2.7		8.3	B, E, H	普通		淡橙	40	P−28
5	皿	H	13.9	2.8		6.7	B, E, H	良好		橙	40	P−18
6	高台付皿	K	14.5	2.9		7.2	B, D	良好		灰白	30	P−17 被熱
7	高台付皿	K	14.7	2.4		7.1	B, E, H	良好		灰白	40	11に似ているが被熱痕跡みられない
8	高台付皿	K	14.8				B, D	良好		灰白	15	P−26
9	高台付皿	K	15.2				B, D, E, H	良好		外−灰白	20	P−17
10	高台付皿	K	18.6				B, D, E, H	良好		外−灰白	15	P−17
11	高台付皿	K	14.7	2.1		6.9	B, C, I	良好		灰白	40	P−25 被熱
12	段皿	K				7.3	B, D, F, G, K	良好		灰白（白やや強い）	60	P−16 被熱
13	段皿	K	14.2	2.7		6.8	B	良好		外−灰白	20	P−17
14	段皿	K	14.1				B, D, E	良好		灰白	10	P−4
15	段皿	K				6.2	B, D, E	良好		灰白	40	P−15
16	段皿	K	16.8				B, D, E	良好		外−灰白	10	P−4
17	壺	H	15.8				B, E	普通		浅黄	5	P−2
18	長頸壺	K	11.8				B, D, E	良好		灰白	50	P−20 被熱
19	長頸壺	K					B, D, E	良好		灰（褐灰）	60	P−21 被熱
20	長頸壺	K					B, D, E	良好		灰白	25	P−18
21	長頸壺	K					B, E, H	良好		灰	15	P−22 被熱
22	長頸壺	K					B	良好		灰白（やや黄味）	80	P−22
23	長頸壺	K				12.4	B, E	良好		外−黒縁。内−灰白	20	P−26
24	長頸壺	K				9.8	B	良好		灰白	10	P−20 被熱
25	器形不詳	K					B, D, E	良好		灰白	25	P−5 被熱
26	高台付大椀	K				28.9	B, E	良好		オリーブ灰	5	P−5
27	鉢	S	29.8				D	良好		青灰	5	P−8

第435表　第55号掘立柱建物跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
28	橙	70		3.2	1.2	69.7	A1	Ic	20	
29	にぶい橙	90		1.7	0.5	12.8	C1	Ib	204	

建物の西側には、第１・２号掘立柱建物跡同様、柱穴に接して平行する不定形の溝が途切れながら南北に走っていた。

棟方向は、N－4°－Eを指す南北棟であった。規模は、身舎だけでも7.13ｍ×4.82ｍを測り、四面の庇を含めると10.74ｍ×8.96ｍとなる。柱心心間の距離は、図の通りである。

遺構の切り合いは、第28号区画溝より古く、第218号竪穴式住居跡よりも新しい。

出土遺物は、柱穴の焼土層中から土師器坏（１～４）、須恵器皿（５）、灰釉陶器高台付皿（６～９）高台付椀（８・10・15）段皿（11～14）三足盤（16）蓋（17）長頸壺（18～25）大椀（26）、須恵器鉢（27）が出土した。

１から４は、土師器の坏である。１・２は、坏Cである。３は、坏Aである．４は、坏ＡＩである。５は、土師器の皿である。17は、土師器の蓋である。２・３は底部が欠損している。17は口縁部のみである。

６から11は、灰釉陶器の高台付皿である。12から16は、灰釉陶器の段皿である。26は、灰釉陶器の高台付大椀である。６から11・13・14・16は底部、15は口縁部が欠損している。12は底部のみ、26は口縁部のみである。

18から24は、灰釉陶器の長頸壺である。18は口縁部のみ、19頸部のみ、23・24は底部のみである。20から22は口縁部と胴部中位以下が欠損している。

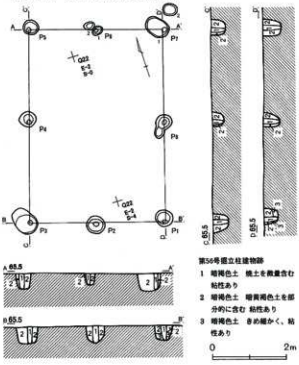
25は、灰釉陶器の器形不詳である。

27は、須恵器（Ｓ）の鉢である。胴部中位以下が欠損している。

28・29は、土錘である。

30は、鉄製品の釘である。

第561図　第56号掘立柱建物跡



第56号掘立柱建物跡（第561図）

Ｐ－22、Ｑ－21・22グリッドで確認された。第56号掘立柱建物跡の周辺は、遺構が密で確認しにくく、第218号竪穴式住居跡のカマド調査中に確認された。遺構確認面は、黄褐色の砂質層の上面であった。

桀行き２間×桁行き２間の建物（二間屋）が検出された。

柱穴は、円形の掘りかたであった。柱穴は、長径0.52ｍ×短径0.29ｍ×深さ0.4ｍを測る小形の柱穴であった。

柱痕跡は、遺構確認面から確認できたが、わかりにくかった。

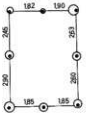
棟方向は、N－17°－Eを指す南北棟であった。規模は、5.12ｍ×3.64ｍを測る。

遺構の切り合いは、第218号住居よりも新しい。

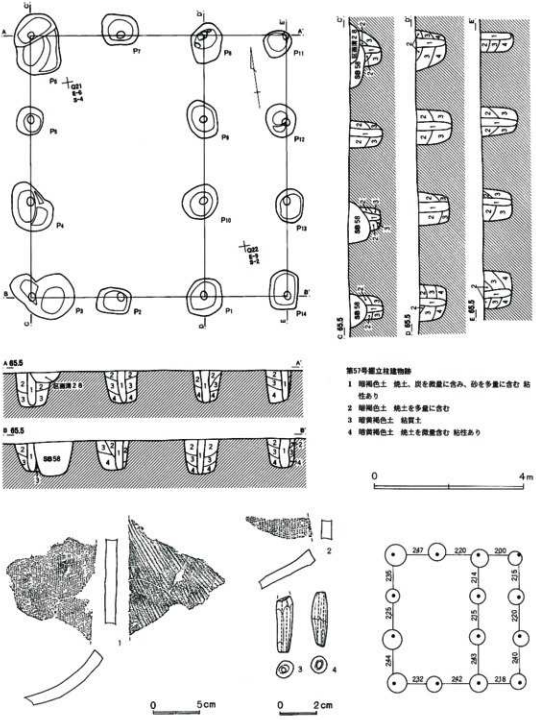
出土遺物は、柱穴からわずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

第57号掘立柱建物跡（第562図）

Ｐ－22、Ｑ－21・22グリッドで確認された。第57号掘立柱建物跡の周辺は、柱穴が激しく重複していた。しかし遺構確認面が、黄褐色の砂質層の上面であったため、比較的確認しやすか



第562図　第57号掘立柱建物跡・出土遺物



第436表　第57号掘立柱建物跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
3	にぶい褐	70		1.0	0.2	2.5	C 2	I a	548	
4	にぶい褐	100	2.9	0.9	0.3	1.7	C 2	I a	549	

った。

梁行き2間×桁行き3間の身舎の東面に、庇のつく建物（三間一面屋）が検出された。

身舎の柱穴は、長径0.88ｍ×短径0.83ｍ×深さ0.88ｍを測り、大形であった。柱痕跡は、遺構確認面から確認できた。土層断面でも立ち腐れ状態が確認ができた。

庇の柱は、身舎の柱と対になるように柱通りを揃え掘られていた。柱穴は、身舎の柱穴とほぼ等しい。身舎・庇とも柱穴の掘りかた内には、焼土・炭化物が充填されていた。

棟方向は、N－9°－Eを指す南北棟であった。規模は、身舎だけでも6.88ｍ×4.63ｍを測り、東庇を含めると6.88ｍ×6.83ｍとなる。柱心心間の距離は、図の通りである。

遺構の切り合いは、第28号区画溝・第56・58号掘立柱建物跡より古い。

出土遺物は、柱穴の焼土層中から平瓦（1・2）、土錘（3・4）が出土した。

1・2は、平瓦である。

3・4は、土錘である。

身舎の柱穴は、南北軸のやや方形の掘りかたであった。柱穴は、長径1.11ｍ×短径1.03ｍ×深さ0.83ｍを測り、大形であった。柱痕跡は、遺構確認面から確認でき、土層断面でも立ち腐れ状態を確認できた。

庇の柱は、身舎の柱と対になるように柱通りを揃え掘られていた。柱穴は、長径0.91ｍ×短径0.7ｍ×深さ0.55ｍ測る。また身舎・庇とも掘りかたには、拳大の礫や粘性の強い黒色土が、堅く充填されていた。身舎の柱痕跡は、遺構確認面から確認できたが、断面観察では、不明瞭だった。

棟方向は、N－4°－Eを指す南北棟であった。規模は、身舎だけでも7.94ｍ×5.2ｍを測り、四面の庇を含めると10.2ｍ×7.55ｍとなる。柱心心間の距離は、図の通りである。

遺構の切り合いは、第57号掘立柱建物跡よりも新しい。

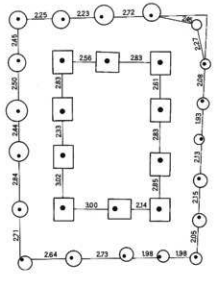
出土遺物は、柱穴の焼土層中から須恵器大甕（1）が出土した。

1は、須恵器（S）の大甕である。口縁部破片である。

第58号掘立柱建物跡（第563図）

R－21・22S－21・22グリッドで確認された。第58号掘立柱建物跡は、遺構確認面が、礫層の上面であったため、当該柱穴の確認に手間取った。

梁行き2間×桁行き3間の身舎に、四面の庇がつく建物（三間四面屋）が検出された。



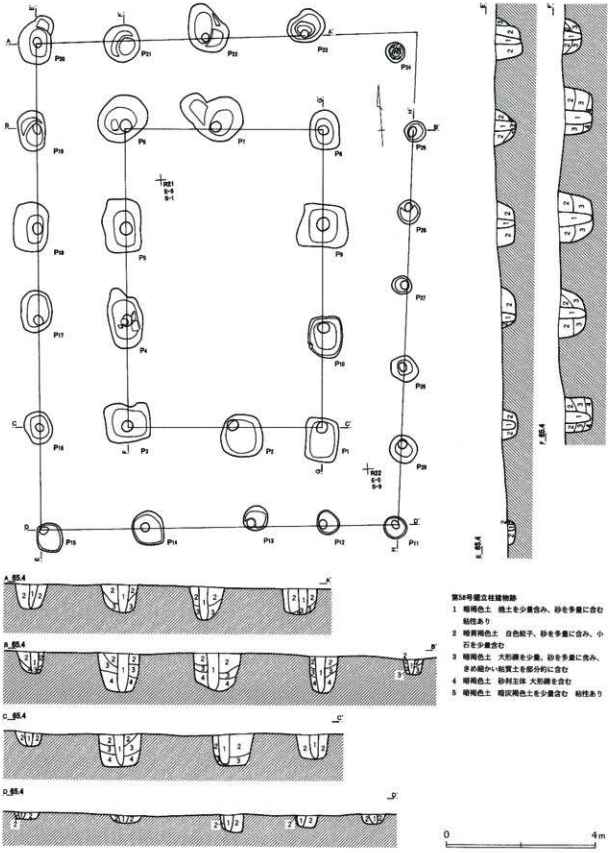
第437表　第57号掘立柱建物跡出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
1	平瓦	酸化炎	平行タタキと刷り消し	布	1面面取り
2	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り

第438表　第58号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	大甕	S					B,D	良好		灰白	20	P5

第563図　第58号掘立柱建物跡



第58号掘立柱建物跡

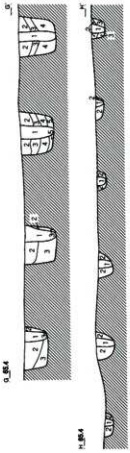
1　暗褐色土　焼土を少量含み、砂を多量に含む　粘性あり

2　暗黄褐色土　白色粒子、砂を多量に含み、小石を少量含む

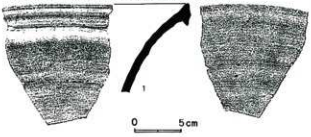
3　暗褐色土　大形礫を少量、砂を多量に含み、きめ細かい粘質土を部分的に含む

4　暗褐色土　砂利主体　大形礫を含む

5　暗灰褐色土を少量含む　粘性あり



第564図　第58号掘立柱建物跡出土遺物



第59号掘立柱建物跡（第565図）

O－24・25グリッドで確認された。第59号掘立柱建物跡の周辺は、遺構確認面が、礫層の上面であったため、当該柱穴の確認に手間取った。

梁行き2間×桁行き2間の建物（二間屋）が検出された。

柱穴は、円形の掘りかたであった。柱穴は、長径0.8m×短径0.77m×深さ0.62mを測る大形の柱穴であった。大量の礫を含む黒色土が、柱穴の掘りかた内に充填されていた。

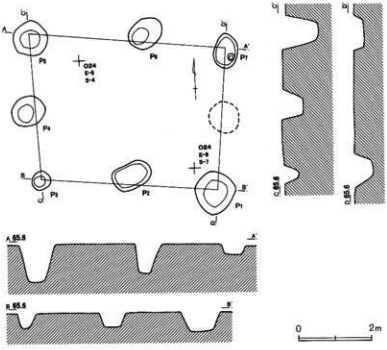
柱痕跡は、確認できなかった。

棟方向は、N－85°－Wを指す東西棟であった。規模は、5.32m×3.89mを測る。

遺構の切り合いは、みられなかった。

出土遺物は、柱穴からわずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

第565図　第59号掘立柱建物跡



第60号掘立柱建物跡（第566図）

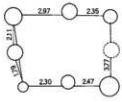
O－25・26、P－25グリッドで確認された。第60号掘立柱建物跡の周辺は、遺構確認面が、礫層の上面であったため、当該柱穴の確認に手間取った。なお東・北側は、調査区外であった。

梁行き2間×桁行き3間の建物（三間屋）が検出された。

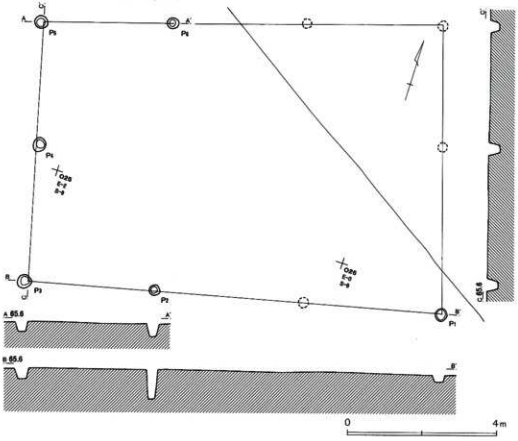
柱穴は、円形の掘りかたであった。柱穴は、長径0.34m×短径0.33m×深さ0.52mを測る小形の柱穴であった。黒色土が、柱穴の掘りかた内に充填されていた。

柱痕跡は、確認できなかった。

棟方向は、N－76°－Eを指す東西棟であった。規模は、11m×6.84mを測る。



第566図　第60号掘立柱建物跡



遺構の切り合いは、みられなかった。

出土遺物は、柱穴からわずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

第61号掘立柱建物跡（第567図）

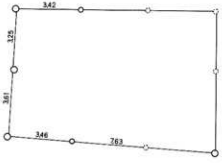
P－24・25、Q－24・25グリッドで確認された。第61号掘立柱建物跡の周辺は、遺構確認面が、礫層の上面であったため、当該柱穴の確認に手間取った。なお東・北側は、調査区外であった。

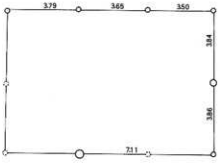
梁行き2間×桁行き3間の建物（三間屋）が検出された。

柱穴は、円形の掘りかたであった。柱穴は、長径0.38m×短径0.38m×深さ0.33mを測る小形の柱穴であった。黒色土が、柱穴の掘りかた内に充填されていた。

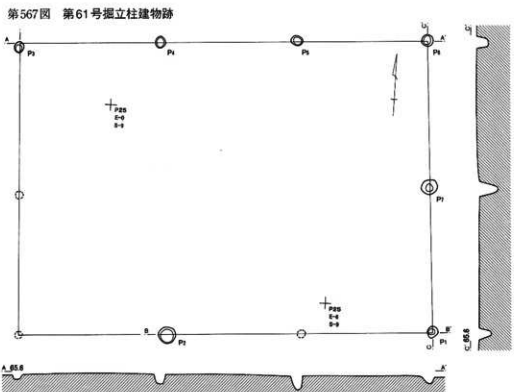
柱痕跡は、確認できなかった。

棟方向は、N－87°－Eを指す東西棟であった。規模は、11.06×7.71mを測る。





第567図　第61号掘立柱建物跡



遺構の切り合いは、みられなかった。

出土遺物は、柱穴からわずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

第62号掘立柱建物跡（第568図）

P－23・24、Q－23・24グリッドで確認された。第62号掘立柱建物跡の周辺は、遺構確認面が、礫層の上面であったため、当該柱穴の確認に手間取った。

梁行き2間×桁行き3間の建物（三間屋）が検出された。

柱穴は、円形の掘りかたであった。柱穴は、長径0.56m×短径0.62m×深さ0.29mを測る小形の柱穴であった。黒色土が、柱穴の掘りかた内に充填されていた。

柱痕跡は、確認できなかった。

棟方向は、N－88°－Wを指す東西棟であった。規模は、7.55m×5.06mを測る。

遺構の切り合いは、みられなかったが、南桁行きの柱列は、第17号柵列の柱列と共有されていた。

出土遺物は、柱穴からわずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

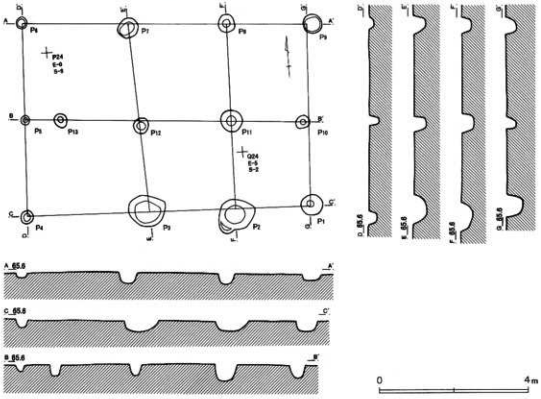
第63号掘立柱建物跡（第569図）

P－23・24、Q－23・24グリッドで確認された。第63号掘立柱建物跡の周辺は、遺構確認面が、礫層の上面であったためと、S－23・24土壙群が、建物の北側と重複していたため、当該柱穴の確認に手間取った。

梁行き2間×桁行き3間の身舎に、西庇が付く建物（三間一面屋）が検出された。

身舎の柱穴は、円形の掘りかたであった。柱穴は、長径0.51m×短径0.48m×深さ0.39mを測る小形の柱穴であった。庇の柱穴は、長径0.37m×短径0.31m×

第568図　第62号掘立柱建物跡



深さ0.32mを測る。身舎・庇とも黒色土が、柱穴の掘りかた内に充填されていた。

柱痕跡は、確認できなかった。

棟方向は、N－3°－Eを指す南北棟であった。規模は、身舎だけで6.85m×4.24m、庇も含めると、6.85m×6.51mを測る。柱の周囲に短い溝が、柱筋に平行し四本巡っていた。

遺構の切り合いは、S－23・24土壙群よりも古く、第228号竪穴式住居跡よりも新しい。

出土遺物は、柱穴から黒色土器皿（1）の他、わずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

1は、黒色土器の椀である。底部破片である。

第64号掘立柱建物跡（第570図）

R－24・25、S－24・25グリッドで確認された。第64号掘立柱建物跡の周辺は、遺構確認面が、礫層の上面であったため、当該柱穴の確認に手間取った。

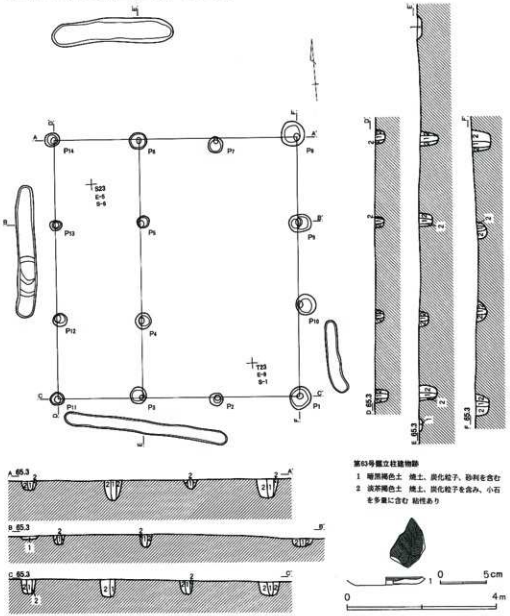
梁行き2間×桁行き3間の身舎に、東庇が付く建物（三間一面屋）が検出された。

身舎の柱穴は、円形の掘りかたであった。柱穴は、

第439表　第63号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	椀	黒色				6.6		良好		浅黄橙	20	P－9

第569図　第63号掘立柱建物跡・出土遺物

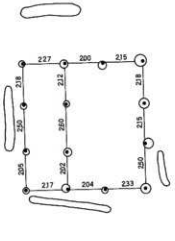


長径0.49m×短径0.42m×深さ0.54m、庇の柱穴は、やや小さい。身舎・庇とも黒色土が、柱穴の掘りかた内に充填されていた。

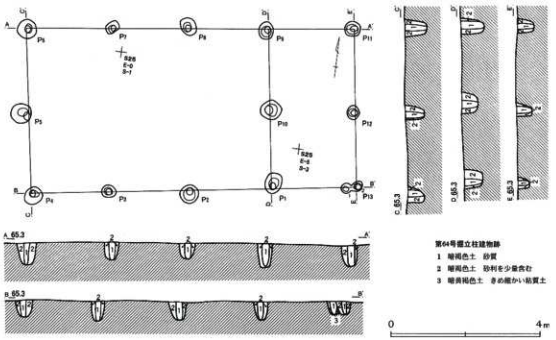
柱痕跡は、確認できなかった。

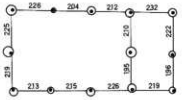
棟方向は、N－82°－Eを指す東西棟であった。規模は、身舎だけで6.48m×4.38m、庇も含めると、8.76m×4.38mを測る。柱の周囲に短い溝が、柱筋に平行し四本巡っていた。

遺構の切り合いは、みられなかった。



第570図　第64号掘立柱建物跡





出土遺物は、柱穴からわずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

第65号掘立柱建物跡（第571図）

P－26・27、Q－26・27グリッドで確認された。第65号掘立柱建物跡の周辺は、遺構確認面が、礫層の上面であったため、当該柱穴の確認に手間取った。

梁行き2間×桁行き3間の身舎の南北に、庇が付く建物（三間二面屋）が検出された。

身舎の柱穴は、円形の掘り方であった。柱穴は、長径0.85m×短径0.74m×深さ0.59m、庇の柱穴は、長径0.54m×短径0.5m×深さ0.47mとやや小さい。身舎・庇とも黒色土と拳大の礫が、柱穴の掘り方内に充填されていた。

柱痕跡は、遺構確認面から確認できた。断面観察でも確認することができた。

棟方向は、N－4°－Wを指す南北棟であった。規模は、身舎だけで6.26m×4.2m、庇も含めると、10.21m×4.2mを測る。

遺構の切り合いは、みられなかった。

出土遺物は、柱穴から灰釉陶器高台付椀（1・2）、鉄製品（3）の他、わずかに土師器・須恵器の破片が出土した。

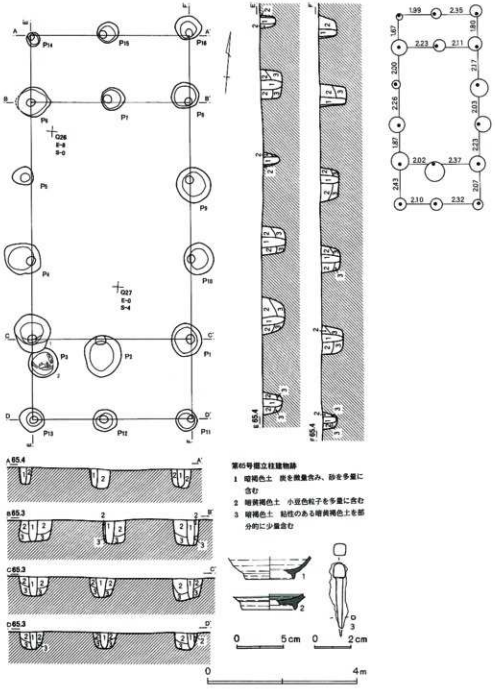
1・2は、灰釉陶器の高台付椀である。底部のみである。

3は、鉄製品の蟹目釘である。

第440表　第65号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	K				5.1		良好		灰白	20	P－1
2	高台付椀	K				5.4	B	普通		灰白	10	P－1

第571図　第65号掘立柱建物跡・出土遺物



報告書抄録

ふ り が な	なかぼりいせき
書　　名	中堀遺跡
副　書　名	御陣場川提調節池関係埋蔵文化財発掘調査報告　第２分冊
巻　　次	
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第190集
編 著 者 名	田中広明・末木啓介
編 集 機 関	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所　在　地	〒369－01　埼玉県大里郡大里村大字笑輪884　TEL 0493－39－3955
発行年月日	西暦1997（平成９）年12月26日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯 °　′　″	東　経 °　′　″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
なかぼりいせき 中堀遺跡	さいたまけんこだまぐんかみさとまち 埼玉県児玉郡上里町 おおあざつつみあざなかぼりみなみ 大字堤字中堀南763 番地他	11385	017	36°14′44″	139°08′10″	19910401 ～ 19941231	27,000	調節池建設

所収遺跡	種別	主な時代	主　な　遺　構	主な遺物	特記事項
中堀遺跡	集落跡	縄文時代		抉入尖頭器 土器　石器	
		古墳時代	住居跡６　溝１	土師器	
		奈良・ 平安時代	住居跡258　掘立柱建物跡65　建物地業跡３　区画溝33　溝42　集石列１　柵列23　道路状遺構２　橋状遺構１　土壙730　土壙群４　井戸跡３　竪穴状遺構14　鍛冶炉跡17　大甕埋設遺構15　土器埋設遺構14　馬骨・人骨出土地点17　畝状遺構３　風倒木跡２	土師器 須恵器 灰釉陶器 緑釉陶器 白磁 石製品 鉄製品 銅製品	遺跡内は、溝により区画された大形掘立柱建物跡・住居跡が整然と配置。 帯金具・漆紙文書・刻字紡錘車・墨書土器等出土
		中世	竪穴状遺構16　掘立柱建物跡２　溝４　集石29　火葬墓１	磁器 陶器	

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第190集

上　里　町

中堀遺跡

御陣場川堤調節池関係
埋蔵文化財発掘調査報告
第２分冊

平成９年12月10日　印刷
平成９年12月26日　発行

発行／財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369－01 埼玉県大里郡大里村大字笑輪884
電話　0493（39）3955
印刷／有限会社　平電子印刷所